イスラーム世界研究　第13巻（2020年3月）182–210頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 13 (March 2020), pp. 182–210

南アジアにおけるイブン・アラビー学派に関する先行研究レビュー
――アシュラフ・アリー・ターナヴィーに関する研究動向と今後の課題――

本間　流星*

A Survey of Previous Studies on Ashraf ‘Alī Thānavī and Subjects for Future Research

HOMMA Ryusei

This paper aims to examine previous studies on Ashraf ‘Alī Thānavī (d. 1362/1943), a prominent Sufi scholar in India in the 19th and 20th centuries, and present the author’s subjects for future research. Thānavī played a crucial role in the Islamic revival movement in late 19th century India, leaving over 600 works (mostly in Urdu) about *Tafsīr*, *Fiqh*, *Kalām*, and *Taṣawwuf*, among others. Because of the historical importance of the movement and his activities, extensive reseaarch has been conducted on his Islamic revival thought. However, Thānavī was deeply influenced by the mystical thought of Ibn ‘Arabī (d. 638/1240), who was a great Sufi mystic in Islamic history and wrote Urdu books about Ibn ‘Arabī, *waḥda al-wujūd* (the Unity of Existence) and Sufism in general. Therefore, Thānavī could be regarded as one of the most important thinkers of the school of Ibn ‘Arabī in South Asia. Nevertheless, studies on his mystical thought are very few. In order to elucidate Thānavī’s interpretation of *waḥda al-wujūd* and standpoint on Ibn ‘Arabī, one should analyze his two important books, *Khuṣūṣ al-Kalim fī Ḥall-i Fuṣūṣ al-Ḥikam* (*Special Word for Dissolving the Ringstones of Wisdom*), an Urdu commentary on Ibn ‘Arabī’s *Fuṣūṣ al-Ḥikam*, and *al-Tanbīh al-Ṭarabī fī Tanzīh Ibn ‘Arabī* (*The Delightful Caveat in the Elevation of Ibn ‘Arabī*), a book written in defense on Ibn ‘Arabī. By focusing on Thānavī’s understanding of Sufism and *waḥda al-wujūd*, one could reveal his position in the school of Ibn ‘Arabī in South Asia.

I. はじめに

本稿は、19–20世紀インドを代表するウラマー・スーフィーであるアシュラフ・アリー・ターナヴィー（Ashraf ‘Alī Thānavī, d. 1362/1943）に関する先行研究を概観し、今後の筆者の研究課題を示すものである。

I-1. 問題の所在

チティック（William C. Chittick）によって、南アジアにおけるイブン・アラビー（Ibn ‘Arabī, d. 638/1240）の思想的影響の広がりが明らかにされてから20年以上が経過しているが、この分野における研究蓄積はいまだ不十分であると言わざるを得ない[1)]。アフマド・スィルヒンディー（Aḥmad Sirhindī, d. 1034/1628）やシャー・ワリーウッラー（Shāh Walī Allāh Muḥaddith Dihlawī, d. 1176/1762）のように、南アジアにとどまらず、イスラーム思想史全体の文脈において重要であった人物に関する研究は今まで多くなされてきた。しかし、その他の南アジアに生きた思想家の著作内容を検討し、イブン・アラビーの用語体系や理論面からの具体的影響を論じた研究は数少ない。

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
1）　William C. Chittick, “Notes on Ibn al-‘Arabi’s Influence in the Subcontinent,” *The Muslim World* 82(3–4), 1992, pp. 218–241は南アジアにおけるイブン・アラビー学派に関する最も網羅的な研究である。

さらに、筆者が分析対象とするウルドゥー語文献を用いたイブン・アラビー学派に関する研究は、管見の限り未開拓の領域であると言える。ウルドゥー語は18世紀後半以降インドにおける文学作品の主要言語となるばかりでなく[2)]、19世紀後半以降のデーオバンド派を中心としたイスラーム改革運動においては、ウルドゥー語によるマドラサ教育や出版活動が盛んに行われていた[3)]。このように近代以降のインドにおいてはウルドゥー語がムスリムたちの主要言語となるのであり、当該地域のイブン・アラビー学派の全体像を理解するためには、ウルドゥー語で書かれたイブン・アラビー関連の作品を分析することは不可欠である。

I-2. ターナヴィー研究の意義

ここでは先ず、筆者が研究対象とするアシュラフ・アリー・ターナヴィーという人物の重要性について一言しておきたい。

ターナヴィーは南アジアで最も有力なスンナ派ウラマーの系統であるデーオバンド派に属し、19世紀後半以降インドのイスラーム改革運動を率いた[4)]。主著『天国の装身具（*Bihishtī Zēwar*）』（1317/1901年完成）は北インドのムスリム女性に向けて書かれた指南書であり、グジャラーティー語やパンジャービー語、ベンガル語などの南アジア諸語に翻訳され、出版から100年以上経過した今日においても多くの人々に読まれている[5)]。また彼は『クルアーンの解明（*Bayān al-Qur'ān*）』（1326/1908年完成）というウルドゥー語のクルアーン注釈書も著している。全12巻から成るこの注釈書は「あらゆるウルドゥー語注釈書の中の王」とも称されるほど、当時のインドにおける知識人や学者から非常に高い評価を得ていた[6)]。生涯で合わせて600以上の著作を残したと言われるターナヴィーは、当時の南アジア・ムスリム社会において絶大な影響力を誇っていたのである[7)]。さらに、彼の法学的見解が収められたファトワー（fatwā）集は、現代のインド、パキスタンにおけるイスラーム法の言説空間の形成に影響力を及ぼしており、彼の遺産は今日に至るまで継承され続けている[8)]。以上のことから、ターナヴィーは19–20世紀南アジアにおける最も重要な思想家の一人と見なされるにふさわしい人物であると言えよう。

では、南アジアのイブン・アラビー学派研究において、ターナヴィーを考察対象とする意義は何であるのか。前述のように、ターナヴィーは19世紀以降インドのイスラーム改革運動を率いた重要人物であった。しかしそれと同時に、彼はイブン・アラビーの主著『叡智の台座（*Fuṣūṣ al-Ḥikam*）』のウルドゥー語注釈や彼の思想について擁護の書を著すなど、イブン・アラビー学派の思想家としても代表的な存在であった。ゆえに、ターナヴィーによるウルドゥー語のイブン・アラビー関連作品に焦点を当て、彼の存在一性論（waḥda al-wujūd）やイブン・アラビーに対する解釈を解明することで、ターナヴィー研究、および南アジアのイブン・アラビー学派研究における新た

2） 麻田豊「ウルドゥー文学」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002, p. 206.

3） Barbara D. Metcalf, *Islamic Revival in British India: Deoband, 1860–1900*. Princeton: Princeton University Press, 1982, p. 102.

4） デーオバンド派に関する研究で最も体系的に論じられたものとして、Barbara D. Metcalf, *Islamic Revival in British India: Deoband, 1860–1900*, Princeton: Princeton University Press, 1982 がある。

5） 牧野真理「アシュラフ・アリー・ターナヴィー著『天国の装身具』」『イスラーム世界研究』3(1), 2009, p. 461.

6） 'Abd al-Mājid Daryābādī, *Tafsīr-i Mājidī*, vol. 1, Karachi: Majlis-i Nashriyāt-i Qur'ān, 1998, p. 18.

7） 'Azīz al-Ḥasan Ghawrī, *Ashraf al-Savāniḥ*, vol. 3, Khwājah 'Azīz al-Ḥasan Majẕūb and Maulānā 'Abd al-Ḥaqq eds., Karachi: Dār al-Ishā'at, 2008, p. 23.

8） Muhammad Q. Zaman, *Ashraf 'Ali Thanawi: Islam in Modern South Asia*, Oxford: Oneworld, 2008, p. 1. 彼の遺産の現代における価値を示す一例として、ラホール（パキスタン）のマドラサ Dār al-'Ulūm Islāmiyyah では、ターナヴィーの説教や思想をまとめた月刊誌『援助（*al-Imdād*）』が刊行されていることが挙げられる。これは、現在に至るまで彼の教えを伝承する営みが続けられていることのあらわれであると言える。

な地平を開くことに貢献できると言えよう。

I-3. 本稿の構成

本稿では、第2章において南アジアにおけるイブン・アラビー学派に関する先行研究を概観する。第3章では、ターナヴィーの生涯とその時代について述べた後、彼の著作情報を紹介する。第4章では、ターナヴィーに関する先行研究をイスラーム改革思想・イスラーム法学・神秘思想という三つのカテゴリーに分けて紹介する。最後に第5章では、南アジアにおけるイブン・アラビー学派とターナヴィーに関する研究動向を踏まえた上で、今後の筆者の研究課題を提示する。

II. 南アジアにおけるイブン・アラビー学派

II-1. 南アジアにおけるイブン・アラビー学派に関する先行研究

南アジアにおけるイブン・アラビー学派に関して先ず参照されるべき研究は［Chittick 1992］である。チティックは14–19世紀南アジアにおけるイブン・アラビー学派の思想家を網羅的に取り上げており、個々の思想家の著作内容の検討を通して、彼らがどの程度イブン・アラビーからの思想的影響を受けていたのかを論じている。ここでは各思想家の著作がイブン・アラビーからの影響度合いに応じてレベルIからVIIまでに分類されており、特に影響が色濃く反映されているレベルVからVIIに分類された著作が主に取り上げられている[9]。また南アジアにおけるイブン・アラビー学派の思想家は、イブン・アラビーの直接的影響というよりは、むしろジャーミー（‘Abd al-Raḥman Jāmī, d. 898/1492）やファルガーニー（Sa‘d al-Dīn al-Farghānī, d. *ca.* 699/1299）の著作からより深い影響を受けていたことが特徴として挙げられている[10]。このチティックによる研究は南アジアのイブン・アラビー学派に関する最も網羅的な研究として評価することができ、当該地域におけるイブン・アラビーの思想的影響の広がりを明らかにしたという意味でも重要な研究である。

しかし、これはチティック自身が述べていることでもあるが、この研究における分析対象はアラビア語とペルシア語によって書かれた著作に限定されており、18世紀後半以降多く見られるようになるウルドゥー語による著作は扱われていない。さらに対象とされている時代も19世紀までであり、20世紀以降に生きたイブン・アラビー学派の思想家の著作は考察の対象外となっている。19世紀後半以降はウルドゥー語でも著作を残したイブン・アラビー学派の思想家が存在したことを踏まえると、チティックの研究は南アジアにおける学派の全体像を示したものであるとは言い難い。

［Stavig 2009］は前述のチティックの研究に依拠しつつ、南アジアにおけるイブン・アラビーの影響について論じており、チティックが取り上げなかった20世紀の南アジアにおけるイブン・アラビー学派についても言及している。Stavigは、20世紀の南アジアでは近代化や世俗化の影響力増大に伴い、イブン・アラビー思想への批判が高まっていた一方で、ターナヴィーのように一貫してイブン・アラビーの擁護者であり続けた人物も存在していたと述べている[11]。さらにStavigはウルドゥー語でイブン・アラビーに関する著作を残した人物としてアブドゥルカーディル・ハイデラバーディー（‘Abd al-Qādir Ḥayderabādī, d. 1269/1853）というスーフィーを紹介している[12]。

9）チティックが重要であると判断したレベルV–VIIの著作の分類基準は次の通りである――V. イブン・アラビーや彼の支持者たちの著作からの重要な影響を示している著作。VI. イブン・アラビー学派に関する重要な資料、もしくは存在一性論と目撃一性論の支持者たちの間の論争を扱っている著作。VII. イブン・アラビー学派への斬新でオリジナルな思想的貢献を果たしている著作。

10）Chittick, *op. cit.*, p. 221.

11）Gopal Stavig, “Ibn ‘Arabi’s Influence in Muslim India,” *Journal of the Muhyiddin Ibn ‘Arabi Society* 45, p. 130.

12）Stavigはハイデラバーディーに関して断片的な著作情報を提示するに留まっているが、彼の学問的背景やスー

このように、Stavig はより広範な時代を対象とし、ウルドゥー語による著作まで視野を広げている点で一定の評価を与えることができるが、紹介されている思想家がごく少数である上に、具体的なウルドゥー語の著作名が一つも挙げられていないことを踏まえると、やはり学派の全体像を細部までを明らかにした研究とは言えない[13)]。

イブン・アラビー学派に焦点が当てられている訳ではないが、[Rizvi 1983] は南アジアにおけるスーフィズムを通史的に扱った基本書であり、南アジアに生きた代表的スーフィーを教団ごとに取り上げ、彼らの生涯や著作をまとめている。また、Rizvi の研究では、イブン・アラビーの神秘哲学についての概説や、南アジアに生きたスーフィーたちがどの程度イブン・アラビーや存在一性論から影響を受けていたのかといった検討も行われている。

Rizvi の研究で取り上げられている教団は、カーディリー教団、シャッターリー教団、ナクシュバンディー教団、チシュティー教団の 4 つである。カーディリー教団に関しては、ムッラー・シャー（Mullāh Shāh, d. 1072/1661）やダーラー・シェコー（Dārā Shikūh, d. 1069/1659）といった著名なスーフィーを含め、ほぼ全ての教団員が存在一性論の熱狂的支持者であったと Rizvi は主張する。シャッターリー教団では、ムハンマド・ガウス（Muḥammad Gawth Gwaliyārī, d. *ca.* 971/1563）[14)] の教えを受けたワリー・ムハンマド（Walī Muḥammad, 没年不詳）が存在一性論の影響を受けていたとされる。

インドにおけるナクシュバンディー教団の名声を高めたバーキービッラー（Bāqībillāh d. 1012/1603）は、目撃一性論者であるスィルヒンディーの導師にあたるが、存在一性論に傾倒していた。Rizvi によれば、バーキービッラーは完璧なスーフィーになるための最終目標として、存在一性論の完全なる認識が必要であると説いたという[15)]。チシュティー教団においては、ニッザームッディーン・イブン・シャイフ・アブドゥ・アッ＝シャクル（Niẓām al-Dīn ibn Shaykh ‘Abd al-Shakur, 没年不詳）が挙げられており、彼はイラーキー（Fakhr al-Dīn ‘Irāqī, d. 688/1289）の傑作『閃光（*Lama‘āt*）』への注釈や、クルアーンの内面的解釈によって存在一性論を語るなど、イブン・アラビーやその後継者たちから思想的影響を大きく受けていた[16)]。そのほかのチシュティー教団のスーフィーに関しては、ムヒッブッラー・イラーハーバーディー（Muḥibb Allāh Ilāhābādī, d. 1058/1648）[17)] やファクルッディーン（Maulānā Fakhr al-Dīn, d. 1126/1714–15）などが熱心な存在一性論者であったことが示されている。

II-2. 個々の思想家に関する先行研究

南アジアにおけるイブン・アラビー学派に関する個別研究は、前述のようにスィルヒンディーやワリーウッラーといったイスラーム思想史全体の文脈において重要であった人物については多く

フィーとしての活動については、近代以降インドに生きたウラマーを取り上げた taẕkirah（伝記）である Saiyid ‘Abd al-Ḥa’i bin Fakhr al-Dīn Ḥusnī, *Tērhōṉ Ṣadī kē ‘Ulamā-yi Barr-i Ṣaghīr*, Anwār al-Ḥaqq Qāsimī (tr.), 2006, Karachi: Dār al-Ishā‘at, p. 447 において簡潔に述べられている。

13）16 世紀南アジアのイブン・アラビー学派に焦点を当てた研究として Iqbal Sabir, “Impact of Ibn ‘Arabi’s Mystical Thought on the Sufis of India during the Sixteenth Century,” in Neeru Misra (ed.), *Sufis and Sufism: Some Reflections*, New Delhi: Manohar, 2004, pp. 129–142 がある。

14）ムハンマド・ガウスの作品分析を通して、スーフィズムとヨーガの関係を論じた研究として、Carl W. Ernst, “Sufism and Yoga according to Muḥammad Gawth,” in his *Refractions of Islam in India: Situating Sufism and Yoga*, New Delhi: Sage Publications, 2016, pp. 149–160 がある。

15）S. A. A. Rizvi, *A History of Sufism in India*, vol. 2, New Delhi: Munshiram Manoharal, 2002, pp. 190.

16）*Ibid.*, pp. 255–256.

17）イラーハーバーディーについては、次節の II-2 で詳述する。

なされてきた。スィルヒンディーに関しては［Buehler 2011］が代表的であり、Friedmann や Ter Haar といったスィルヒンディー研究の先駆者たちのこれまでの議論を踏まえ、新たなスィルヒンディー像の構築を試みている。Buehler はスィルヒンディーとイブン・アラビーの思想的対立がこれまで過剰に取り上げられてきたことに批判的であり、実際にはスィルヒンディーがイブン・アラビーの『叡智の台座』や『マッカ啓示（*al-Futūḥāt al-Makkīya*）』といった著作を称賛していたことや、当時のスーフィーたちの見解では両者の思想的対立は存在しなかったことを指摘している[18]。

ワリーウッラーに関しては［Baljon 1986］が彼の思想に関する基本書であり、啓典解釈やイスラームにおける義務行為、神秘思想、形而上学、社会・経済思想といった側面から網羅的・体系的に論じられている。Baljon によれば、ワリーウッラーはイブン・アラビーの存在一性論とスィルヒンディーの目撃一性論（waḥda al-shuhūd）の違いは単なる表現の問題であるとして、両者の調和を提唱したという[19]。

スィルヒンディーやワリーウッラー以外のイブン・アラビー学派に関する個別研究としては［Lipton 2007］がある。この論考では、南アジアにおける最も重要なイブン・アラビー思想の支持者とされているムヒッブッラー・イラーハーバーディー[20]のアラビア語作品『付与と受容の間の等価（*al-Tawsiya bayna al-Ifāda wa al-Qabūl*）』の分析を通して、彼の存在一性論やイブン・アラビーからの思想的影響が論じられている。Lipton は、イブン・アラビーの「真実在の真実在（ḥaqīqa al-ḥaqā’iq）」とネオ・プラトニズムの「能動知性（the Active Intellect）」を同一のものとみなし、「真実在の真実在」は神の絶対一者的側面と宇宙（神の被造物）的側面の両方を兼ね備えた概念として位置付けられるという、ムヒッブッラーの宇宙論を明らかにしている[21]。

Lipton の研究は、南アジアにおける特定の思想家のイブン・アラビー学派的側面に着目し、その人物の思想とイブン・アラビーからの具体的影響を論じた数少ない研究である。しかし、このことは裏を返せば、個別の思想家に焦点を当てた研究に関しては、南アジアにおいてはほとんど手付かずの状態であるということを示している。イブン・アラビーの著作や注釈の内容と南アジアで書かれた諸作品の内容を検討し、イブン・アラビーの用語体系や理論面からの具体的影響を明らかにしていくことは、今後の重要な研究課題であると言える。

II-3. ウルドゥー語で著作を残したイブン・アラビー学派の思想家

ここでは、ターナヴィー以外にウルドゥー語で著作を残したイブン・アラビー学派の思想家を紹介する。ミール・ダルドはチシュティー教団とナクシュバンディー・ムジャッディディー教団に属したスーフィーであり、主にウルドゥー語とペルシア語で著作活動を行なった[22]。『書物の知識（*‘Ilm*

18）Arthur F. Buehler, “Aḥmad Sirhindī: A 21st-Century Update,” *Der Islam* 86, 2011, p. 138.

19）J. M. S. Baljon, *Religion and Thought of Shāh Walī Allāh Dihlawī, 1703–1762*, Leiden: E. J. Brill, 1986, pp. 60–63. 南アジアにおける存在一性論と目撃一性論の間の論争を取り上げた研究としては、Muhammad Umar, “The Doctrines of Waḥda al-Wujūd and Waḥda al-Shuhūd,” in his *Islam in Northern India during the Eighteenth Century*, New Delhi: Munshiram Manoharlal, 1993, pp. 115–124 がある。Umar はナクシュバンディー・ムジャッディディー教団のスーフィーであったミール・ダルド（Mīr Dard, d. 1200/1785）を主に取り上げ、彼の存在一性論や目撃一性論の解釈をもとに議論を組み立てている。

20）ムヒッブッラー・イラーハーバーディーは『叡智の台座』や『マッカ啓示』から直接的に影響を受けており、南アジアのスーフィーに多く見られるファルガーニーやジャーミーからの影響はほとんど見られない（Chittick, *op. cit.*, p. 233.）。

21）G. A. Lipton, “Muḥibb Allāh Ilāhābādī’s *The Equivalence between Giving and Receiving*: Avicennan Neoplatonism and the School of Ibn ‘Arabī in South Asia,” M. A. Thesis, the University of North Carolina at Chapel Hill, 2007, pp. 97–100.

22）二宮文子「ミール・ダルド」東長靖・中西竜也編『イブン・アラビー学派文献目録』京都大学イスラーム地域研究センター, 2010, pp. 316–318.

al-Kitāb）』はタリーカ・ムハンマディーヤについて論じられたペルシア語著作である。そこでは、存在一性論は汎神論的な表現である「全ては彼なり（Hama ūst）」ではなく、「全ては彼からである Hama z-ūst」という言葉によって表現されるべきであり、それは本質的に目撃一性論と同じであると説明されている[23]。また、彼はウルドゥー語の詩集（dīvān）を残すなど、ウルドゥー文学において最も著名な人物の一人でもある[24]。

メフル・アリー・シャー（Mehr ‘Alī Shāh Gīlānī Gōlarvī, d. 1356/1937）は 19–20 世紀インドに生きたチシュティー教団のスーフィーである[25]。彼は 1275/1859 年にイスラマーバード郊外のゴールラ・シャリーフという町に生まれ、南アジア各地を遊学したのち、故郷に戻ってハナフィー学派の法学者、スーフィーとして活躍した[26]。存在一性論について述べられた『真理者の言葉における真理の確証（*Taḥqīq al-Ḥaqq fī Kalima al-Ḥaqq*）』はペルシア語で書かれているが、彼の『叡智の台座』についての講義録『鋭気の論集（*Maqālāt al-Mardiyah*）』や書簡集（maktūbāt）や説話集（malfūẓāt）などの作品がウルドゥー語で残されている[27]。メフル・アリー・シャーはターナヴィーとほぼ同時代に生きた人物である上に、ターナヴィーと同じスーフィー導師であるイムダードゥッラー（Ḥājī Imdādullāh d. 1317/1899）[28] の弟子でもあった。ゆえに、二人の思想には多くの共通点が見出されることが予測され、両者のイブン・アラビー学派の側面を比較することも可能であろう。

パキスタンのスーフィー詩人であるザヒーン・シャー・タージー（Ẕahīn Shāh Tājī, d. 1398/1978）は『叡智の台座』のウルドゥー語訳を行っている[29]。また、『イスラームの鏡（*Islāmī Ā’īn*）』と『ワッハーブ派とイスラーム（*Wahhābiyyat aur Islām*）』は彼のイスラーム政治思想に関するウルドゥー語著作である[30]。また［Stavig 2009］で紹介されたアブドゥルカーディル・ハイデラバーディーはウルドゥー語とアラビア語でイブン・アラビーに関する作品を残している。彼の代表作『真理（*al-Ḥaqq*）』はアラビア語であるものの、イブン・アラビーについて書かれた重要著作である[31]。

III. ターナヴィーについて

III-1. ターナヴィーの生涯[32]

ターナヴィーは 1280/1863 年、北インドのウッタルプラデーシュ州にある小さな町、ターナ・バヴァン（Thāna Bhavan, 図 1 参照）に生まれる。幼くして母を亡くした影響で、幼少期から孤独で内向的な人生を送ったが、ムスリムとしては信仰心が厚く、日頃から熱心に礼拝に励んでいた。

23）Rizvi, *op. cit.*, pp. 245, 457.

24）ミール・ダルドに関する先行研究は Waḥīd Akhtar, *Khwājah Mīr Dard: Taṣawwuf aur Shā‘irī*, ‘Alīgaṛh: Anjuman-i Taraqqī-yi Urdū, 1971 があり、彼のスーフィズム観と詩集について論じられている。

25）Muḥammad Fāḍil Khān, *Mehr-i Munīr: Biography of Ḥaẓrat Pīr Syed Mehr ‘Alī Shāh Gīlānī of Golra Sharif*, 2nd edi, Golra Sharif, Islamabad: Dargāh-yi Ghousia Mehrīyah, 2010 はメフル・アリー・シャーについて書かれた最も信頼できる伝記である。

26）二宮「メフル・アリー・シャー・ギーラーニー・ゴーラルヴィー」東長・中西編, 前掲書, pp. 355–356.

27）Qaisar Shahzad, “Ibn ‘Arabi’s Studies in Urdu,” *The Muhyiddin Ibn ‘Arabi Society Newsletter* 22, 2009, p. 2.

28）イムダードゥッラーや彼の所属していた教団であるチシュティー・サービリー（Chishtī-Sābrī）教団については、Moin Ahmad Nizami, *Reform and Renewal in South Asian Islam: The Chishti-Sabris in 18th–19th Century North India*, New Delhi: Oxford University Press, 2017 を参照のこと。

29）二宮「ザヒーン・シャー・タージー」東長・中西編, 前掲書, pp. 362–363.

30）ザヒーン・シャー・タージーに関する先行研究として、Syed Ghoẕanfar Aḥmed, “Maulānā Muḥammad Ṯāsīn al-Ma‘rūf Haẕrat Bābā Ẕahīn Shāh Tājī kī ‘Ilmī, Fikrī kī Khidmāt kā Taḥqīqī Jā’izah,” Ph. D. diss, Karachi University, 2013 がある。

31）Stavig, *op. cit.*, p. 127.

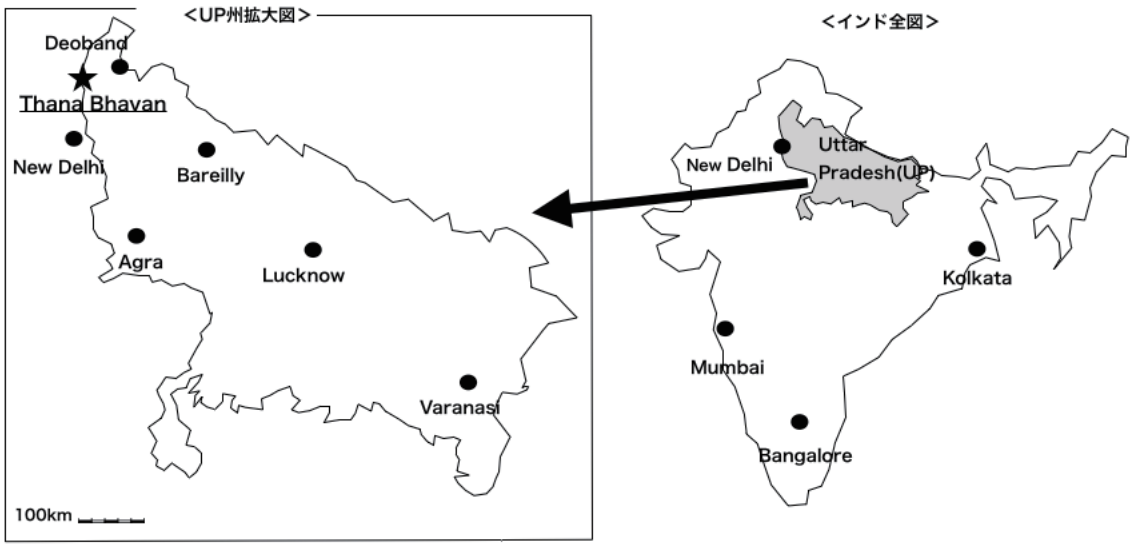
32）ターナヴィーの生涯については、Ghawrī, *op. cit.*; Ali Altaf Mian, “Surviving Modernity: Ashraf ‘Alī Thānvī (1863–1943) and the Making of Muslim Orthodoxy in Colonial India,” Ph. D. diss, Duke University, 2015; Zaman, *op. cit.* などを参照のこと。

ターナヴィーは父の意向により、伝統的なイスラーム学の教育を受けて育ち、1295/1878年（15歳）にはデーオバンド学院に入学し、本格的にイスラーム諸学を学び始めることとなる。1300/1882年（20歳）にデーオバンド学院を卒業するが、在学中より神秘主義に関心を抱いていた彼は、チシュティー・サービリー教団のイムダードゥッラーと書簡を交わしており、彼の弟子になることを懇願していた。

1302/1884年、ターナヴィーはマッカ、マディーナ両聖都への巡礼を果たしたが、この時に彼は正式にイムダードゥッラーの弟子として受け入れられる。ターナヴィーは1310/1893年に二度目の巡礼のためマッカに六ヶ月間滞在するが、この間に彼は導師のイムダードゥッラーの下で精神的指導を受けていたという。これによってターナヴィーの神秘主義的傾向は一層高まった。そして丁度この時、彼はイブン・アラビーの存在一性論にも傾倒し始めていた。

マッカ巡礼から帰還し、いくつかのマドラサで教鞭をとったのち、ターナヴィーは1315/1898年にターナ・バヴァンに帰郷した。そこで彼は自身の導師の名にちなんだイムダーディーヤ道場（Imdādiyyah Khānqāh）を設立し、スーフィー導師としての活動を開始した。当時35歳のターナヴィーはこの頃から執筆活動に専念するようになり、主著『天国の装身具』や『クルアーンの解明』の他、リサーラ（risālah, 宗教小冊子）、ワアズ（wa‘ẓ, 宗教的な助言）、ファトワー集など多くの作品を残した。

ターナヴィーは1377/1919年に地元の修道場とマドラサの運営権を甥のシャッビール・アリー・ターナヴィー（Shabbīr ‘Alī Thānavī, d. *ca.* 1388/1968）に委譲した。1344/1926年には、デーオバンド学院の総長に任命されるが、1354/1935年に辞任している。当時70歳を過ぎていたターナヴィーは身体衰弱のため、30年以上続けてきたインド各地での説教活動も休止していた。晩年のターナヴィーは、ひたすら神秘主義的な思索に没入していたという。1362/1943年、ターナヴィーは故郷ターナ・バヴァンにて80年間の生涯を閉じている。



<図1　ターナ・バヴァンと周辺の主要都市>（筆者作成）

III-2. ターナヴィーの生涯とその時代（図２参照）

ターナヴィーの生きた時代は南アジア・ムスリム社会とイスラーム思想史双方における変革期であった。南アジアにおいては先ず、1275/1858 年、インド大反乱の失敗によってインドがイギリスの直接統治下に置かれ、ムガル帝国によるムスリム政権が終焉を迎えた。1284/1867 年にデーオバンド学院が設立され、19 世紀末にはアフレ・ハディース派（Ahl-i Ḥadīs̱）、バレールヴィー派（Barēlvī）が活動を開始するなど、近代インドのイスラーム改革主義勢力が次々と台頭していた。1323/1906 年には、最終的にパキスタン建国を果たす全インド・ムスリム連盟（All-India Muslim League）が創立され、インドとパキスタンの分離独立の兆しも見え始めていた。1359/1940 年、ラホール決議が採択されると、ヒンドゥーとムスリムは異なった民族であるという「二民族論」の原則の下、パキスタン運動が開始され、結果として 1366/1947 年の印パ分離独立へとつながっていく。

他方、イスラーム世界全体を見渡してみると、先ずは 1282/1865 年、オスマン政府の専制化に伴い新オスマン人と呼ばれる立憲制を要求する知識人や啓蒙家グループが秘密結社を結成する。彼らは『ヒュッリイェト』や『ムフビル』などの新聞の刊行を通して西欧の政治思想導入に努めた。1301/1884 年、アフガーニー（Jamāl al-Dīn al-Afghānī, d. 1314/1897）とムハンマド・アブドゥ

＜生涯＞	＜イスラーム思想史の出来事＞	＜南アジアでの出来事＞
		1274/1857 年 インド大反乱勃発（–1275/1858 年）
1280/1863 年 ターナ・バヴァンに生まれる	1282/1865 年 新オスマン人らによる改革運動開始	
		1284/1867 年 デーオバンド学院設立
	1285/1868 年 オスマン語新聞『ヒュッリイェト』紙創刊	
1295/1878 年 デーオバンド学院に入学（1882年卒業）		1292/1875 年 アフマド・カーンがアリーガル・カレッジ設立
1301/1884 年 マッカ巡礼を果たす	1301/1884 年 アフガーニーとアブドゥが雑誌『固き絆』刊行	
1310/1893 年 二度目のマッカ巡礼へ		1307/1889 年 アフマディーヤ教団成立
1315/1898 年 ターナ・バヴァンに帰郷	1315/1898 年 ラシード・リダーが週刊誌『マナール』刊行	
		19C 末頃 アフレ・ハディース派とバレールヴィー派が活動開始
1317/1901 年 主著『天国の装身具』を著す	1317/1899 年 カースィム・アミーンが『女性の解放』を著す	
	1319/1902 年 第３次サウード朝建設	1323/1906 年 全インド・ムスリム連盟創立大会（ダッカ）
1326/1908 年 クルアーン注釈書 *Bayān al-Qur'ān* を著す		
	1341/1922 年 オスマン朝のスルタン制廃止	1338/1919 年 ヒラーファト運動開始（–1924 年）
1344/1926 年 デーオバンド学院学長に就任（1354/1935 年辞任）		
	1347/1928 年 ハサン・バンナーがムスリム同胞団設立	1349/1930 年 イクバールの「北西インド・ムスリム国家」提唱
	1351/1932 年 サウディアラビア建国	1359/1940 年 ラホール決議採択
1362/1943 年 ターナ・バヴァンに没する		

＜図２　ターナヴィーの生涯・イスラーム思想史・南アジアでの出来事対照表＞

※「イスラーム年表」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002, pp. 1089–1104; Mian, *op, cit.*, p. 301 をもとに筆者作成。

（Muḥammad ‘Abduh, d. 1323/1905）がムスリム団結を訴える政治評論誌『固き絆』を、1315/1898年にはラシード・リダー（Muḥammad Rashīd Riḍā, d. 1354/1935）がイスラーム復興を呼びかける『マナール』を刊行するなどサラフィー主義の潮流も高まりを見せていた。1347/1928年のハサン・バンナー（Ḥasan al-Bannā, d. 1368/1949）によるムスリム同胞団の設立も、このサラフィー主義の流れの中に位置付けることができる。

このように、ターナヴィーは南アジアにおいては、イギリス植民地支配の開始に伴うムスリム政権崩壊から印パ分離独立に至る直前までの、まさに激動とも言える時代に生きていた。また、イスラーム世界全体においては、オスマン帝国における西洋思想導入の機運の高まりとサラフィー主義の台頭といった思想史上の転換点にターナヴィーを位置付けることができる。ターナヴィーは主に南アジアにおいてウルドゥー語を解するムスリムたちに向けて著作活動を行なっていたため、彼の思想的背景には南アジアでの出来事が多くの部分関わっていたことは確かである。しかし、彼は生涯で二度もマッカ巡礼に赴き、滞在先で神秘主義的傾向を強めるなど、中東イスラーム世界からも思想的影響を少なからず受けていたと思われる。従来のターナヴィー研究においては、彼の思想的背景や影響力は南アジアの文脈に限定されて語られることがほとんどであったが、イスラーム世界全体の思想史的文脈の中にターナヴィーを位置付けるといった試みも可能であると言うことができよう。

III-3. ターナヴィーの著作[33)]

［Ghawrī 2008］によると、ターナヴィーは生涯で666本もの著作を残しており、そのジャンルはクルアーン注釈学（タフスィール）、ハディース学、イスラーム法学、イスラーム神学、クルアーン読誦学、タサウウフなど多岐にわたる。彼は主にウルドゥー語で著作を残したが、アラビア語著作もいくつか存在する。しかし、その数はウルドゥー語著作と比較すると圧倒的に少ない。このことは、ターナヴィーがあくまでもウルドゥー語を解する一般的な民衆を意識して著述を行っていたことを示していると言えよう。

以下、ターナヴィーが残した著作について筆者が現時点で把握している限り、テーマ別にすべて列挙する。なお、筆者の研究対象であるタサウウフに関する著作は、書誌情報不詳の場合でも書名が分かっている限り掲載した。

＜説教集・説話集（Khuṭbāt, Malfūẓāt）＞

1. *Ādāb-i Islām*『イスラームの儀礼』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）
2. *Ā’īna-yi Tarbiyat*『教導の鏡』[34)]
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
3. *Ashraf al-Malfūẓāt fī Marẓ al-Vafāt*『死病に関するアシュラフの説教集』

33）ターナヴィーの著作リスト作成にあたっては、“Maulānā Thānavī kī Taṣānīf kī Tafṣīl,” in Muftī Niẓām al-Dīn Shāmzī Shahīd, *Ḥaẕrat Maulānā Ashraf ‘Alī Thānavī kā Ṭarīqah-yi Iṣlāḥ*, Sa’īd Abrār ‘Alī ed., Lahore: Bayt al-‘Ulūm, n. d., pp. 230–258を適宜参照した。ここではターナヴィーの著作がクルアーン注釈学・クルアーン学（tafsīr, ‘ulūm al-Qur’ān）、ハディース学（‘ulūm-i ḥadīth）、信条（‘aqā’id）、イスラーム法学・ファトワー集（fiqh, fatāwā）、タサウウフ（sulūk va taṣawwuf）、論理学（manṭiq）、イスラーム神学（‘ilm al-kalām）、改革書（iṣlāhiyyāt）、聖者伝・伝記（sīrat va savāniḥ）、祈り（du‘ā）・唱名（aẕkār）・実践（‘amaliyyāt）・日々の務め（vaẕā’if）、その他（mutafarriqāt）に分類されている。

34）『教導の鏡』はターナヴィーのスーフィズムに関する著作『旅人教導（*Tarbiyat al-Sālik*）』の要点をまとめた作品である。

（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

4. *Anfās-i ‘Īsā*『イーサーの諸息吹』
（Karachi: H. M. Sa‘īd Company, n. d.）

5. *Farhangī Ta‘līm va Tahẕīb*『叡智の教育と啓発』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

6. *Faiẓ al-Raḥmān*『慈愛の溢出』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

7. *Faiẓ al-Khalā’iq va Kalimat al-Ḥaqq*『被造物の溢出と真理者の言葉』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

8. *Ḥusn al-‘Azīz*『親愛の美』
（5 vols., Saharanpur: Maktabah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

9. *al-Ifāẓāt al-Yaumiyyah min al-Ifādāt al-Qaumiyyah*『民衆の利益からの日々の溢出』
（10 vols., Lahore: Idārah-yi Ta’līfāti-i Ashrafiyyah, 1984–86）

10. *Islām kī Ta‘līmāt-i E‘tidāl*『イスラームの中庸の教え』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

11. *Jadīd Malfūẓāt*『新説教集』
（3 vols., Karachi: Ashraf al-‘Ulūm Sho‘ba-yi Dār al-‘Ulūm, n. d.）

12. *Jamīl al-Kalām, As‘ad al-Abrār*『言葉の美、最も幸福なる聖者たち』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

13. *Jadīd Malfūẓāt, Maḥẓūẓāt, Maḥfūẓāt*『新たな説教集、喜び、保護』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

14. *Javāhir al-Ḥusn*『美の宝石』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

15. *al-Kalām al-Ḥusn*『美の言葉』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）

16. *Khair al-Ifādāt* (*Malfūẓāt-i Ḥaẓrat Thānavī*)『利益の繁栄（ターナヴィー師の説教集）』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）

17. *Khuṭbāt al-Aḥkām*『定めの説教集』
（Karachi: Maktabat al-Basharī, n. d.）

18. *Khuṭbāt-i Ḥakīm al-Ummat*『ウンマの賢人の説教集』
（32 vols., Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

19. *Ma‘ārif va Masā’il-i Ramaẓān*『霊知とラマダーンの諸問題』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

20. *Majālis-i Ḥakīm al-Ummat*『ウンマの賢人の集会』
（Maulānā Muftī Muḥammad Shafī‘ ed., Karachi: Dār al-Ishā‘at, n. d.）

21. *Majālis-i Ḥikmat va Khumkhānah-yi Bāṭin*『叡智の集会と内面の酒場』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

22. *Malfūẓāt-i Aẓhar Khair al-Ifādāt*『最も明確な利益の繁栄の説教集』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

23. *Malfūẓāt-i Ashrafiyyah*『アシュラフの説教集』

（Karachi: Siddīqī Trust, n. d.）

24. *Malfūẓāt barāye Khavātēn*『女性たちのための説教集』
（Karachi: Siddīqī Trust, n. d.）

25. *Malfūẓāt-i Kamālāt-i Ashrafiyyah*『アシュラフの完全性の説教集』
（Karachi: Kutubkhānah Ashrafiyyah, n. d.）

26. *Malfūẓāt-i Ḥakīm al-Ummat*『ウンマの賢人の説話集』
（31 vols., Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

27. *Malfūẓāt-i Maqālāt-i Ḥikmat va Mujādalāt-i Ma'dalat*『叡智の言葉と正義の闘争の説教集』
（Lahore: Idārah-yi Ta'līfāti-i Ashrafiyyah, n. d.）

28. *Maqālāt-i Ḥikmat*『叡智の論集』
（Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

29. *Maqālāt-i Taṣawwuf*『タサウウフ論集』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

30. *Maulānā Ashraf 'Alī Thānavī kā 'Ulamā-yi Karām sē Khiṭāb*『アシュラフ・アリー・ターナヴィー師の偉大なるウラマーによる説教』
（Karachi: Kutubkhānah Maẓharī）

31. *Mavā'iẓ-i Ashrafiyyah*『アシュラフの説法集』
（10 vols., Karachi: Maktabah-yi Thānavī, n. d.）

32. *Mazīd al-Majīd*『偉大なる増加』
（Muzaffarnagar: Maktabah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah Thānah Bhavan, n. d.）

33. *Mir'āt al-Āyāt va al-Ḥadīth*『クルアーンの章句とハディースの鏡』
（Lahore :Sho'bah-yi Nashr va Ishā'at Idārah-yi Ashraf al-Taḥqīq, n. d.）

34. *Maḥabbat-i Rasūl*『使徒の愛』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

35. *Namāz kē Ahamm Masā'il*『礼拝の重要な諸問題』
（Lahore: Idārah-yi Ashraf al-Taḥqīq, n. d.）

36. *Safarnāmah-yi Ḥayderābād Dekan*『デカン地方ハイダラーバード旅行記』
（Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

37. *Safarnāmah-yi Lāhōr va Lakhnau*『ラホール・ラクナウ旅行記』
（Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

38. *Sharaf-i Muṣṭafā*『ムスタファの栄誉』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

39. *Sifārish kī Faẓīlat*『勧告の完全性』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

40. *Tahẕīb al-Akhlāq*『倫理の洗練』
（Bahawalnagar: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah Hārūn, n. d.）

＜書簡集（Maktūbāt）＞

1. *Ashraf al-Maktūbāt*『最も高貴なる書簡集』
（Karachi: Idārat al-Qur'ān, n. d.）

2. *Iṣlāḥ-i Dil*『魂の改革』
（Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
3. *Maktūbāt-i Ashrafiyyah*『アシュラフの書簡集』
（Karachi: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
4. *Maktūbāt-i Imdādiyyah*『イムダードゥッラーの書簡集』
（Thānah Bhavan: Maktabah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
5. *Maktūbāt va Bayāẕ-i Ya'qūbī*『書簡集とヤークーブの手記』
（Karachi: Dār al-Ishā'at, n. d.）
6. *al-Raqīm al-Jalīl*『栄光の書簡』
（Lahore: Idārah-yi Ashraf al-'Ulūm Jāmi'ah Ashrafiyyah, n. d.）
7. *Tarbiyat al-Nisā*『女性たちの教導』
（Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

＜タフスィール・クルアーン学（Tafsīr, 'Ulūm al-Qur'ān）＞

1. *Ashraf al-Tafāsīr*『最も高貴なるタフスィール』
（4 vols., Muḥammad Taqī 'Uthmānī ed., Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
2. *Bayān al-Qur'ān*『クルアーンの解明』
（12 vols., Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
3. *Jamāl al-Qur'ān*『クルアーンの美』
（Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
4. *Khulāṣah-yi Bayān al-Qur'ān*『クルアーンの解明の真髄』
（Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
5. *Risālah Malāḥat al-Bayān fī Faṣāḥat al-Qur'ān*『クルアーンの言葉の優美さに関する説明の精妙さについての論考』
（Delhi: Maṭba'-yi Mujtabā'ī, n. d.）
6. *Sūrah-yi Yāsīn*『ヤースィーン章』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
7. *Tafsīr Bayān al-Qur'ān*『クルアーンの解明の注釈』
（3 vols., Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah）
8. *Tajwīd al-Qur'ān*『クルアーン読誦学』
（Karachi: H. M. Sa'īd Company, n. d.）
9. *al-Tartīb al-Laṭīf fī Qiṣṣat al-Kalīm va al-Ḥanīf*『話し手と真の信仰者の議論に関する繊細な調整』
（Delhi: Maṭba'-yi Tajbā'ī, 1925?）
10. *Tarjumah-yi Qur'ān Karīm*『偉大なるクルアーンの翻訳』
（Karachi: Tāj Company, n. d.）
11. *al-Tarqīq al-Jalī fī Taḥqīq al-Nūn al-Khafī*『秘密のヌーンの探求における明白な稀少性』
（Delhi: Maṭba'-yi Tajbā'ī, n. d.）
12. *Tashīl-i Bayān al-Qur'ān*『クルアーンの解明の簡略化』
（2 vols., Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
13. *al-Taqṣīr fī al-Tafsīr*『タフスィールにおける過ち』

（Deoband: Maṭba‘-yi Qāsimī, n. d.）

＜ハディース学（‘Ulūm-i Ḥadīth）＞

1. *Ashraf al-Kalām fī Aḥādīth Khair al-Anām*『最も良き人間の言動に関する最も高貴なる言葉』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
2. *A‘lā al-Sunan*『最も高尚なるスンナ』
（21 vols., Karachi: Idārat al-Qur’ān va al-‘Ulūm al-Islmiyyah, n. d.）
3. *Chihil Ḥadīth*『40 のハディース』
（Karachi: Idārat al-Ma‘ārif, n. d.）
4. *al-Idrāk va al-Tavaṣṣul ilā Ḥaqīqat-i Ishtirāk va al-Tavassul*『共同の真実と神へと至る努力への諸理解と媒介』
（Lahore: ‘Ilmī Printing Press, n. d.）
5. *Ḥaqīqat al-Ṭarīqah min al-Sunnah al-‘Anīqah*『洗練されたスンナからのタリーカの真実』[35]
（Deoband: Ittiḥād Book Depot, 2002.）
6. *Intikhāb-i Bukhārī*『ブハーリー選集』
（2 vols., Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
7. *al-Maslak al-Zakī ya‘nī Taqrīr Tirmizī*『純然たる流儀すなわちティルミズィー[36] の演説』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
8. *Mu’akhkharat al-Ẓunūn ‘an Muqaddimah Ibn Khaldūn*『イブン・ハルドゥーンの序章についての諸見解の結末』
（Delhi: Maṭba‘-yi Mujtabā’ī, n. d.）

＜法学（Fiqh）＞

1. *Aḥkām al-I‘tilāf fī Aḥkām al-Ikhtilāf*『不和の定めに関する交際の規則』
（Deoband: Ittiḥād Book Depot, n. d.）
2. *Aḥkām-i Ṭalāq va Niẓām-i Shar‘ī ‘Adālat, ya‘nī al-Ḥīlat al-Jazā*『離婚の法規とシャリーア法廷制度、すなわち報復の戦略』
（Maulānā Khurushīd Ḥasan Qāsimī ed., Lahore: Nāshirān va Tājirān Kutub, 1996.）
3. *Aḥkām-i Pardah, ‘Aql va Naql kī Raushnī men*『パルダの法規――理性と模倣の観点において』
（Muḥammad Za’īd Maẓāhirī Nadvī ed., Idārah-yi Ifādāt al-Ashrafiyyah: Lucknow, 2016?）
4. *Aḥkām al-Qur’ān*『クルアーンの定め』
（vols. 1–5., Karachi: Idārat al-Qur’ān va al-‘Ulūm al-Islāmiyyah, n. d., vols. 6–11., Lahore: Idārah-yi Ashraf al-Taḥqīq Jāmi‘ah Dār al-‘Ulūm Islāmiyyah, n. d.）
5. *Ashraf al-Aḥkām ya‘nī Tamma-yi Imdād al-Fatāwā*『最も高貴なる定めすなわちファトワーの完全なる援助』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）

35）『洗練されたスンナからのタリーカの真実』の英訳として、*A Sufi Study of Hadith*, Yusuf Talal Delorenzo (tr.), London: Turath Publishing, 2010 がある。

36）ティルミズィーとは、ハディース学者のアブー・イーサー・ティルミズィー（Abū ‘Īsā Muḥammad ibn ‘Īsā al-Tirmidhī, d. 892）のことであり、スンナ派の正統なハディース集に数えられる『スナン』を編纂した。

6. *Bihishtī Zēwar*『天国の装身具』[37)]
（Lahore: Al-Mīzān, 2015）
7. *Bihishtī Gauhar*『天国の宝石』
（Karachi: Zaur Muḥammad Kārkhanah Tijārat, n. d.）
8. *Bihishtī Samar*『天国の報償』
（Karachi: Tāj Company, n. d.）
9. *Darsī Bihishtī Zēwar*『教訓的天国の装身具』
（Karachi: Bayt al-‘Ilm Trust, 2010）
10. *Dīn kī Bātēn*『宗教の話』
（Karachi: Maktabah-yi Rashīdiyyah, n. d.）
11. *Fatāwā-yi Ashrafiyyah*『アシュラフのファトワー集』
（Karachi: H. M. Sa‘īd Company, n. d.）
12. *Fatāwā-yi Mīlād ma‘ Ṭarīqah-yi Mīlād*『キリスト降誕の道によるキリスト降誕のファトワー集』
（Lahore: Maktabah-yi Qāsimiyyah, n. d.）
13. *Hadīyah-yi Ahl-i Ḥadīth*『ハディースの徒の贈り物』
（Ṣūfī Muḥammad Iqbāl Qurayshī ed., Deoband: Maktabah-yi Madaniyyah, 2001）
14. *al-Ḥīlah al-Nājizah ya‘nī ‘Auratōn kā Ḥaqq-i Tansīkh-i Nikāh*『完全な戦略すなわち女性の婚姻取消の権利』
（Karachi: Dār al-Ishā‘at, 1987.）
15. *Ḥuqūq al-Zaujayīn*『妻たちの権利』
（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）
16. *Imdād al-Fatāwā*『ファトワーの援助』
（6 vols., Maulānā Muftī Muḥammad Shāfi‘ ed., Karachi: Maktabah-yi Dār al-‘Ulūm, 2010.）
17. *al-‘Ilm va al-‘Ulamā*『知識とウラマー』
（Muftī Muḥammad Zayd Maẓāhirī Nadvī ed., Lucknow: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, 1999.）
18. *Irshād al-Hā’im fī Ḥuqūq al-Bahā’im*『獣の諸権利に関する当惑した導き』
（Delhi: Kutub Khānah Ashrafiyyah, 1925.）
19. *Islāmī Shādī*『イスラームの婚姻』
（Muftī Muḥmmad Zayd Maẓāhirī Nadvī ed., Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
20. *Masā’il-i Bihishtī Zēwar*『天国の装身具の諸問題』
（Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
21. *al-Qaul al-Badā’i‘ fī Ishtirāṭ al-Miṣr li al-Tajmī‘*『金曜礼拝の集会のための規定に関する奇跡の言葉』
（Deoband: Ashraf al-‘Ulūm Sho‘bah-yi Dār al-Ishā‘at, n. d.）
22. *Taqlīd va Ijtihād*『タクリードとイジュティハード』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
23. *Toḥfāh-yi Zaujayn ya‘nī Ḥuqūq-i Mu‘āsharāt*『夫婦の贈り物すなわち社会生活の諸権利』
（Maulānā Muftī Muḥammad Zayd ed., Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）

37）『天国の装身具』の翻訳・解題として、*Perfecting Woman: Mawlana Ashraf Ali Thanawi’s Bihishti Zewar*, Barbara D. Metcalf (tr.), 1992, Berkeley: University of Carolina Press がある。

＜信仰・神学（‘Aqā’id, ‘Ilm al-Kalām）＞

1. *Aḥkām-i Islām ‘Aql kī Naẕar meṉ*『理性的観点におけるイスラームの定め』
（Lahore: Islāmī Kutubkhānah, 2002）
2. *Aḥkām al-Tajallī min al-Ta‘allī va al-Tadallī*『自賛と謙虚からの顕現の規則』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
3. *Ashraf al-Javāb*『最も高貴なる答え』
（Karachi: Maktabah-yi ‘Umr Fārūq, n. d.）
4. *Furū‘ al-Īmān*『信仰の末葉』
（Delhi: Tāj Company, n. d.）
5. *Ḥifẓ al-Īmān*『信仰の保護』
（Deoband: Dār al-Kitāb, n. d.）
6. *Ḥifẓ al-Īmān ‘an al-Zīgh va al-Ṭughyān*『過ちと不服従についての信仰の保護』
（Lahore: Dār al-Kutub, n. d.）
7. *al-Intibāhāt al-Mufīdah ‘an al-Ishtibāhāt al-Jadīdah*『新たな疑念についての有益な暗示』[38]
（Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
8. *Islām aur ‘Aqlīyat*『イスラームと合理主義』
（Maulānā Muḥammad Muṣṭafā Khān Bijnaurī ed., Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, 1994.）
9. *Islām kē Buniyādī Aḥkām*『イスラームの基本的定め』
（Karachi: Qadīmī Kutub Khānah, n. d.）
10. *Jazā’ al-A‘māl*『行為の報い』
（Muftī Abū al-Khair ‘Ārif Maḥmūd ed., Karachi: Maktabah-yi Fārūqiyyah, 2013.）
11. *Mas’alah-yi Taqdīr*『天命の問題』
（Lahore: Idārah-yi Ashrafiyyah, n. d.）
12. *al-Maṣāliḥ al-‘Aqlīyah li al-Aḥkām al-Naqlīyah*『伝承の定めのための理性の和解』
（Delhi: World Islamic Publishers, 1981）
13. *Shauq-i Ākhirat*『来世の渇望』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
14. *Shauq-i Vaṭan*『祖国の渇望』
（Lahore: Anjuman-i Iḥyā-yi al-Sunnah, 2004）
15. *Ta‘līm al-Dīn*『宗教の教え』
（Karachi: Bēqam ‘Ā’ishah Bāwānī Waqf, 1992）
16. *Toḥfah-yi Ramaẕān*『ラマダーンの贈り物』
（Lahore: Maktabat al-‘Ilm, n. d.）
17. *Tuḥfah al-‘Ulamā*『ウラマーの贈り物』
（2 vols., Maulānā Muftī Muḥammad Zayd ed., Multan: Idārah-yi Ta’līfāt Ashrafiyyah, n. d.）

＜タサウウフ（Taṣawwuf）＞

1. *Anwār al-Naẕar fī Āsār al-Ẕafar*『勝利の痕跡に関する視覚の光』

38）『新たな疑念に関する有益な暗示』の英訳として、*Answers to Modernism*, Muhammad Hasan Askari, and Karrar Husain (tr.), Delhi: Adam Publishers, 1981 がある。

（書誌情報不詳）

2. *Anwār al-Wujūd fī Aṭwār al-Shuhūd*『目撃の方法に関する存在の光』[39]（アラビア語）

（書誌情報不詳）

3. *Bawādir al-Nawādir*『稀少なる出来事の前兆』

（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, 1985）

4. *Dukhūl va Khurūj bar Nuzūl va ʻUrūj*『下降と上昇についての入場と退場』

（書誌情報不詳）

5. *Ḥaqq al-Samāʻ*『サマーウ[40]の真理』

（書誌情報不詳）

6. *al-Ibtilāʼ al-Ahl al-Iṣṭifāʼ*『選良の人々の試練』

（書誌情報不詳）

7. *ʻIrfān-i Ḥāfiẓ*『ハーフェズの霊知』

（Karachi: Nafīs Academy, 1976）

8. *al-Irshād ilā Masʼalat al-Istiʻdād*『才能の問題に対する示唆』

（書誌情報不詳）

9. *Iṣlāḥ al-Mizāj bi Aṣlaḥ al-ʻIlāj*『最も賢明な治療による気質の改革』

（書誌情報不詳）

10. *Iṣlāḥī Niṣāb*『改革の教科書』

（Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）

11. *Jauhar-i Ḥakīm al-Ummat*『ウンマの賢人の宝石』

（Karachi: Idārat al-Qurʼān va al-ʻUlūm Islāmiyyah, n. d.）

12. *Jihād-i Akbar*『最も偉大なるジハード』

（書誌情報不詳）

13. *Karāmāt-i Imdādiyyah yaʻnī Majmūʻah-yi Karāmāt-i Ḥaẓrat Quṭb-i ʻĀlam Ḥājī Imdādullāh Chishtī Ṣābirī Muḥājir Makkī*『イムダードゥッラーの奇跡すなわち世界の頂点ハージー・チシュティー・ムハージル・マッキー師の奇跡集成』

（Shahkot: Kutubkhānah Sharaf al-Rashīd, n. d.）

14. *Kilīd-i Maṯnavī*『マスナヴィーの鍵』[41]

（24 vols., Multan: Idārah-yi Taʼlīfāt-i Ashrafiyyah, 2005）

15. *Khuṣūṣ al-Kalim fī Ḥall-i Fuṣūṣ al-Ḥikam*『叡智の台座の解明に関する特別な言葉』

（Lahore: Nazir Sons Publishers, 1998）

16. *Maʻārif-i Ashrafiyyah*『アシュラフの霊知』

（8 vols., Multan: Idārah-yi Taʼlīfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

17. *Maʻārif al-Mavārif*『霊知の中の霊知』

39）『目撃の方法に関する存在の光』は、ターナヴィーが 1893 年、二度目のマッカ巡礼に赴いた際に完成させた著作であり、おそらく彼が存在一性論について書いた最初の著作であると思われる。また、本書のタイトルに「目撃（shuhūd）」という語が用いられていることから、ターナヴィーはスィルヒンディーの目撃一性論からも少なからず影響を受けていたと考えられる。

40）サマーウ（samāʻ）は歌舞音曲を伴うスーフィーの修行の一種。原義は「聴くこと」。インドのチシュティー教団に特徴的である。

41）13 世紀の神秘主義詩人ルーミー（Jalāl al-Dīn Muḥammad al-Barkhī al-Rūmī, d. 672/1273）著『精神的マスナヴィー』のウルドゥー語注釈。

（書誌情報不詳）

18. *Masā'il-i Maṯnavī*『マスナヴィーの諸問題』
（Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

19. *Masā'il al-Sulūk min Kalām Malik al-Mulūk (Masā'il-i Taṣawwuf Qur'ān kī Raushnī meṉ)*『王の中の王の言葉からの旅の諸問題（クルアーンの光におけるタサウウフの諸問題）』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）

20. *Maqālāt-i Ṣūfiyyah*『スーフィー論集』
（Karachi: Dār al-Ishā'at, n. d.）

21. *Mulakhkhaṣ al-Anwār wa al-Tajallī*『光と顕現の本質』[42]（アラビア語）
（書誌情報不詳）

22. *al-Nukat al-Daqīqah*『精妙な機知』
（書誌情報不詳）

23. *Qaṣd al-Sabīl ilā al-Maulā al-Jalīl*『偉大なる主への道の目的』
（Muftī Muḥammad Shāfī' ed., Karachi: Idārat al-Ma'ārif, n. d.）

24. *Raḥmat al-Muta'allimīn*『師たちの慈愛』
（書誌情報不詳）

25. *Shaiḵh Ibn 'Arabī kā Maslak*『イブン・アラビー師の流儀』
（書誌情報不詳）

26. *Shajarat al-Murād*『欲望の木』
（書誌情報不詳）

27. *Sharī'at va Ṭarīqat*『シャリーアとタリーカ』
（Maulānā Muḥammad Dīn ed., Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）

28. *Taḥrīẓ 'alā Ṣāliḥ al-Ta'rīẓ*『反抗的な善行者に対する教唆』
（書誌情報不詳）

29. *Tā'īd al-Ḥaqīqah bi al-Āyāt al-'Atīqah*『解放された章句による真実の支持』
（書誌情報不詳）

30. *Ṭarīq al-Qalandar*『カランダルの道』
（Peshawar: Khānqāh-yi Imdādiyyah Ashrafiyyah, n. d.）

31. *Tarbiyat al-Sālik*『旅人教導』
（4 vols., Karachi: Dār al-Ishā'at, n. d.）

32. *al-Tajallī al-'Aẓīm fī Aḥsan Taqwīm*『完全な対称性における偉大なる顕現』[43]（アラビア語）
（書誌情報不詳）

33. *al-Takashshuf 'an Muhimmāt al-Taṣawwuf*『タサウウフの重要な諸問題についての開示』[44]
（Lahore: Sang-e-Meel Publications, 2005）

34. *Takmīl al-Taṣarruf fī Tashīl al-Tasharruf*『栄光の要綱に関する権威の完成』
（書誌情報不詳）

42）『光と顕現の本質』は『目撃の方法に関する存在の光』の要約版である。

43）『完全な対称性における偉大なる顕現』は『目撃の方法に関する存在の光』の内容の一部である。

44）『タサウウフの重要な諸問題についての開示』は、ターナヴィーのスーフィズムに関する諸作品の内容を一冊にまとめた大著であり、彼のスーフィズムに対する中心的理解を知る手がかりとなる。

35. *al-Tasharruf bi Ma'rifa Aḥādīth al-Taṣawwuf*『タサウウフのハディースを覚知することによる栄光』
（6 vols., Multan: Idārah-yi Ta'līfāt-i Ashrafiyyah, 2006）
36. *Tashīl Tarbiyat al-Sālik*『旅人教導の簡略化』
（Karachi: Zam Zam Publishers, 2009）
37. *al-Tanbīh al-Ṯarabī fi Tanzīh Ibn 'Arabī*『イブン・アラビーのタンズィーフに関する喜びの訓戒』
（In *Armaghān-i Ibn 'Arabī*, Abū Najīb Ḥājī Muḥammad Arshad Qureshī ed., Lahore: Taṣawwuf Foundation, 1999, pp. 1–156.）
38. *Tuḥfat al-Shuyūkh*『シャイフたちの贈り物』
（Karachi: Kutubkhānah Maẓharī, n. d.）
39. *Uṣūl-i Taṣawwuf*『タサウウフの原則』
（Maulānā Shāh 'Abd al-Ghanī Phūlpūrī ed., Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, 1983.）

＜改革書（Iṣlāḥīyāt）＞

1. *Ādāb al-Mu'āsharat*『社会生活の儀礼』
（Karachi: Idārat al-Qur'ān va al-'Ulūm al-Islāmiyyah, n. d.）
2. *Ādāb-i Zindagī*『生活の儀礼』
（Lahore: Suḥail Publishers, 1999.）
3. *Aghlāt al-'Avām*『大衆の過ち』
（Maulānā Mihrbān 'Alī Bāṛotvī ed., Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
4. *Ḥayāt al-Muslimīn*『ムスリムの生命』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
5. *Ḥuqūq al-'Ibād*『奴隷たちの諸権利』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
6. *Ḥuqūq al-'Ilm*『知識の諸権利』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
7. *Ḥuqūq al-Islām*『イスラームの諸権利』
（Karachi: Maktabah-yi Rashīdiyyah, n. d.）
8. *Ḥuqūq al-Vālidain*『両親の諸権利』
（Muḥammad 'Abdulraḥīm Nāshir ed., Lahore: Tājir Kutub, n. d.）
9. *Iṣlāḥ-i Inqilāb-i Ummat*『ウンマの騒乱の改革』
（Karachi: Idārat al-Ma'ārif, n. d.）
10. *Iṣlāḥ al-Khayāl*『想像力の改革』
（Lahore: Kutubkhānah Jamīlī, n. d.）
11. *Iṣlāḥ-i Khavātēn*『女性たちの改革』
（Maulānā Muftī Muḥammad Zayd ed., Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
12. *Iṣlāḥ al-Muslimīn*『ムスリムたちの改革』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, 1982）
13. *Iṣlāḥ al-Nisā'*『婦人たちの改革』
（Lahore: Maktabat al-'Ilm, n. d.）

14. *Iṣlāḥ al-Rusūm*『諸慣習の改革』
（Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
15. *Islāmī Zindagī*『イスラーム的生活』
（Multan: Maktabah-yi Ḥaqqāniyyah, n. d.）
16. *al-Iqtiṣād fī al-Taqlīd va al-Ijtihād*『タクリードとイジュティハードにおける中庸』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, 1985）
17. *al-Sauq li Ahl al-Shauq*『熱望の人々のための動員』
（Allahabad: Maṭba‘-i Anwār Aḥmadī Vāqe‘, n. d.）

＜聖者伝・伝記（Sīrat, Savāniḥ）＞

1. *Amīr al-Rivāyāt fī Ḥabīb al-Ḥikāyat*『物語の恋人に関する諸伝統の主』
（Saharanpur: Kutubkhānah Imdād al-Ghurbā, n. d.）
2. *Arvāḥ-i Salāsah ya‘nī Ḥikāyāt-i Auliyā*『三つの諸霊魂すなわち聖者たちの物語』
（Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
3. *Imdād al-Mushtāq ilā Ashraf al-Akhlāq*『最も高貴なる倫理への望まれるものの援助』
（Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）
4. *Jamāl al-Auliyā*『聖者たちの美』
（Lahore: Maktabah-yi Islāmiyyah, n. d.）
5. *Ma‘ārif al-Akābir*『偉人たちの霊知』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, 2014）
6. *Ma‘ārif al-Imdādiyyah*『イムダードゥッラーの霊知』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
7. *Ma‘ārif al-Gangōhī*『ガンゴーヒー[45]の霊知』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
8. *Ma‘ārif al-Nānautavī*『ナーノウタヴィー[46]の霊知』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
9. *Nashr al-Ṭayyib fī Ẕikr al-Nabī al-Ḥabīb*『最愛の預言者のズィクルにおける善の拡散』
（Karachi: Dār al-Ishā‘at, n. d.）
10. *Qiṣaṣ al-Akābir*『偉人たちの物語』
（Lahore: Maktabah-yi Ashrafiyyah, n. d.）
11. *Qiṣaṣ al-Auliyā ya‘nī Nuzhat al-Bisātēn*『聖者たちの物語すなわち諸物質の喜び』
（Karachi: Dār al-Ishā‘at, n. d.）
12. *Sham al-Ṭayyib*『善の匂い』
（Karachi: Tāj Company, n. d.）
13. *Sīrat-i Manṣūr Ḥallāj*『マンスール・ハッラージュの伝記』
（Karachi: Maktabah-yi Dār al-‘Ulūm, n. d.）
14. *Sīrat al-Rasūl Akram*『最も寛大なる使徒の伝記』

45）ラシード・アフマド・ガンゴーヒー（Rashīd Aḥmad Gangōhī, d. 1905）はデーオバンド学院創設時（1867年）に活躍したウラマーであり、のちのイスラーム改革運動を率いた。

46）ムハンマド・カースィム・ナーノウタヴィー（Muḥammad Qāsim Nānautavī, d. 1877）はデーオバンド学院を創設し、同時代のアフマド・ガンゴーヒーと共にのちのイスラーム改革運動を主導した。

（Lahore: Nazir Sons Publishers, n. d.）

15. *al-Sunnah al-Jaliyyah fī al-Chishtiyyah al-‘Ala’iyyah*『至高なるチシュティーヤに関する明確なスンナ』

（Allahabad: Isrār al-Karīmī, n. d.）

16. *Ta‘līm al-Ṭālib ma‘ Shajarah-yi Ṭaiyibah Chishtiyyah-yi ‘Āliyyah*『高貴なるチシュティーヤの喜びの木を伴った求める者の教え』

（Karachi: Siddiqī Trust, n. d.）

17. *Ṭarīqah-yi Maulid Sharīf*『高貴なるマウリドの道』

（Saharanpur: Maktabah-yi Fēz al-Qur’ān Deoband, n. d.）

＜祈り・唱名・実践・日々の務め（Du‘ā, Azkār, ‘Amaliyyāt, Vazā’if）＞

1. *A‘māl-i Qur’ānī*『クルアーン的行い』

（Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）

2. *‘Amaliyyāt-i Khāṣ Ḥazrat Thānavī*『ターナヴィー師の特別な実践』

（Karachi: Siddīqī Trust, n. d.）

3. *Ashraf al-‘Amaliyyāt ya‘nī ‘Amaliyyāt va Ta‘vīzāt aur us kē Shar‘ī Aḥkām ma‘ A‘māl Qur’ānī Mukammal*『最も高貴なる実践すなわち実践と御守りそして完全なるクルアーン的行為を伴うシャリーアの規則』

（Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）

4. *Ashrafī Namāz*『アシュラフの礼拝』

（Lahore: Ẓafar Sanz, n. d.）

5. *Asmā al-Ḥusnā, Durūd-i Sharīf aur Masnūn*『99 の美名、高貴で研ぎ澄まされた恩寵』

（Lahore: Idārat al-Qāsim, n. d.）

6. *Aurād-i Raḥmānī* (*‘Amaliyyāt-i Asmā-i Ḥusnā*)『慈愛的祈りの実践（99 の美名の行い）』

（Karachi: Maktabah-yi Rashīdiyyah, n. d.）

7. *Aurād-i Raḥmānī va Azkār-i Sajjānī*『慈愛的祈りの実践と恋人の唱名』

（Deoband: Kutubkhānah A‘zāziyyah, n. d.）

8. *Apnī Namāzēn Durust Kīji’yē*『自身の礼拝を改めよ』

（Maulānā Ishfāq Aḥmad Qāsimī ed., Lahore: Maktabah-yi Raḥmāniyyah, n. d.）

9. *Bayāẓ-i Ashrafī*『アシュラフの手記』

（Multan: Idārah-yi Ta’līfāt-i Ashrafiyyah, n. d.）

10. *Faẓā’il-i Istighfār*『恩恵を求めることの徳』

（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）

11. *Ḥizb al-Baḥr*『海の詩』

（Karachi: Kutubkhānah Maẓharī, n. d.）

12. *Īṣāl-i Ṣavāb aur us kā Aḥkām va Masā’il*『追善とその規則および諸問題』

（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）

13. *Jum‘ah kē Aḥkām va Faẓā’il*『金曜礼拝の定めと恩恵』

（Karachi: Maktabah-yi Qāsim al-‘Ulūm, n. d.）

14. *Khuṭbāt al-Aḥkām*『定めの説教集』

（Karachi: Tāj Company, n. d.）
15. *Ma‘mūlāt-i Ashrafī*『アシュラフの諸慣習』
（Lahore: Maktabah-yi Ashrafiyyah, n. d.）
16. *Majmū‘-yi Khuṭbāt-i Māṣūrah*『口承伝統の説教集成』
（Lahore: Maktabat al-‘Ilm, n. d.）
17. *Masā’il-i Namāz*『礼拝の諸問題』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
18. *Munājāt-i Maqbūl*『受け入れられた親密な語らい』
（Maulānā ‘Abd al-Mājid Daryābādī ed., Lahore: Iqrā-yi Ashrafiyyah Company, n. d.）
19. *Sāl Bhar kē Masnūn A‘māl*『年中の研ぎ澄まされた行い』
（Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt, n. d.）
20. *Qur’ānī ‘Ilāj*『クルアーン的治療』
（Lahore: Maktabah-yi Khalīl, n. d.）
21. *Zād al-Sa‘īd* (*Majmū‘-yi Durūd-i Sharīf*)『サイードの誕生（高貴なる祝福の集成）』
（Karachi: Dār al-Ishā‘at, n. d.）

ターナヴィーのイブン・アラビー学派としての側面を明らかにする際、『叡智の台座の解明に関する特別な言葉』（以下『特別な言葉』）と『イブン・アラビーのタンズィーフに関する喜びの訓戒』（以下『喜びの訓戒』）の二作品は特に重要である。『特別な言葉』はイブン・アラビーの主著『叡智の台座』のウルドゥー語注釈書であり、1338/1919 年に脱稿された。『叡智の台座』の難解な箇所をウルドゥー語で分かりやすく伝えることを目的としたこの作品は、主に「アーダム章」の内容についての注釈がなされている[47]。執筆に至った経緯としては、ターナヴィーがハイダラーバードの友人から、「『叡智の台座』のウルドゥー語注釈を書いて欲しい。それは強く必要とされている。」という旨の書簡を受け取り、その友人の要望に応じたためであると、注釈書の中で語られている[48]。当時の南アジア・ムスリムたちの間に広がっていた、イブン・アラビーや彼の『叡智の台座』に対する無知や誤解を解消したいという意図が彼の中にあったことが窺える。

『喜びの訓戒』はイブン・アラビーの擁護を目的とした書であり、1346/1927 年に脱稿された。この作品においてターナヴィーは、イブン・アラビー思想の中の根拠も無く批判されている箇所について、イブン・アラビー自身の言葉を用いて説明することを試みている[49]。本書の冒頭においてターナヴィーは、イブン・アラビーの言葉にはシャリーアの規範に抵触するものが含まれていることは確かであり、実際のところ、イブン・アラビー支持者たちが彼の問題発言について弁明することに苦労していたことを認めている。しかしながら、ターナヴィーによると、イブン・アラビーのあらゆる言葉は彼の霊知（‘ulūm mukāshafa）から発せられたため、それらを字義通り解釈するのでは不

47）『叡智の台座』の「アーダム章」の邦訳として、井筒俊彦「イブン・アラビー『叡智の台座』（第一章）井筒俊彦訳」『井筒俊彦全集』（別巻）慶應義塾大学出版会, 2016, pp. 6–42 がある。

48）Ashraf ‘Alī Thānavī, *Khuṣūṣ al-Kalim fī Ḥall-i Fuṣūṣ al-Ḥikam*, Lahore: Nazir Sons Publishers, 1998, p. 2.

49）『喜びの訓戒』の章構成は次のとおりである――
序章「諸々の訓戒のうち重要な部分についての要約」、第 1 章「シャリーアの教えに関するスーフィー知識人たちの立場」、第 2 章「イブン・アラビーについての高位のムスリム知識人たちの証言」、第 3 章「スーフィーたちとタサウウフの教えに関する理想的立場」、第 4 章「イブン・アラビーの問題発言に対する彼自身の反批判の言葉」、終章「（ターナヴィー）自身のイブン・アラビーに関する立場」。

十分であり、内面的・神秘的解釈を用いることでのみ真意を導き出すことができるという[50]。『喜びの訓戒』も『特別な言葉』と同様に、ターナヴィーがイブン・アラビーの擁護者という立場から執筆していることが明確となっている。この二作品の分析を通して、当時の南アジア・ムスリム社会において、ターナヴィーがイブン・アラビーの思想や術語をウルドゥー語によってどのように解釈し、民衆に伝えようとしたのかを窺い知ることができると同時に、彼のイブン・アラビー学派としての位置付けも明らかにすることができると言える。

IV. ターナヴィーに関する先行研究

IV-1. ターナヴィーのイスラーム改革思想に関する先行研究

ターナヴィーのイスラーム改革思想については、その思想の影響力の大きさや重要性から最も研究が進んでいる分野である。資料として用いられている著作も、代表作『天国の装身具』を筆頭に、彼が執筆活動に専念するようになった時期（1890 年代末から没年まで）に残された改革思想に関する様々な著作が分析対象となっている。

まずは Metcalf による二つの研究を挙げることができ、どちらも『天国の装身具』を分析対象としている。

［Metcalf 1982b］は、当時の南アジア・ムスリム社会において実践されていた逸脱的な慣習（rasm, rivāj, dastūr）についてのターナヴィーの見解を『天国の装身具』における記述から論じたものである。『天国の装身具』においては、イスラームの啓典の基準に照らしてムスリムたちの日常的行為を評価するという形式が取られている。この論考では、ムスリムたちはシャリーアの規範のみに従うべきであり、逸脱的な慣習（聖者崇拝や過度に豪華な結婚式など）は重大な罪にあたるという、ターナヴィーの慣習に関する否定的な見解が明らかにされている。また、［Metcalf 1984］はイスラームのアダブ（adab, 礼儀作法）[51] について同じく『天国の装身具』の分析を通して論じている。ターナヴィーは本来ムスリム男性のみが身につけるべきものとされているアダブを、女性にも身につける義務があるとして、女性への教育・啓蒙を訴えた。この論考では、ターナヴィーがムスリム女性の知性発達や社会的地位向上をイスラーム改革における重要な要素として挙げていることを、『天国の装身具』におけるアダブの記述から明らかにされている。この Metcalf の二つの研究では、民衆の実践やムスリム女性におけるターナヴィーの改革思想の重要性が指摘されているが、彼の神秘思想や存在一性論と関連付けて論じられている箇所は見当たらない。

Naeem においても、ターナヴィーの改革思想に関する二つの重要な研究がある。まず［Naeem 2009a］はターナヴィーの『新たな疑念についての有益な暗示（*al-Intibāhāt al-Mufīdah ʻan al-Ishtibāhāt al-Jadīdah*）』（以下、『有益な暗示』）という西洋近代主義への批判書を資料として用いている。『有益な暗示』は近代合理主義者[52] らの科学的命題や誤ったイスラーム解釈について取り上げ、それらを逐一批判・論駁するという形式を取っている。ここでは『有益な暗示』の考察を通して、ターナヴィーが西洋近代主義をイスラームの知的伝統に基づいて批判し、結果としてイスラームと近代の調和の可能性を証明することに成功したということが述べられている。

［Naeem 2009b］はスーフィズムをイスラーム改革の軸に据えたターナヴィーの改革思想について論じている。ターナヴィーはスーフィズムの実践を通した内面の純化をムスリム社会変革のた

50）Mian, *op. cit.*, p. 69.

51）礼儀作法や文学一般を指す言葉であるが、ここでは礼儀作法の意味で用いられている。

52）ここではインド・ムスリムの中の近代主義者たちのことを指している。

めの重要な手段とみなしており、当時の南アジア・ムスリム社会においてイスラーム復興とスーフィー的伝統の間には深い共存関係があったことが示されている。しかしながら、このNaeemの二つの研究では、上述のMetcalfの研究と同様に、ターナヴィーの神秘思想については考察対象となっておらず、彼のイスラーム改革思想がイブン・アラビー学派の側面とは完全に切り離されて論じられていることは否めない。

［Mian 2015］では、ターナヴィーに代表される伝統的ウラマーたちが植民地期インドにおいて自らの神学・法学・スーフィズムの教えを拡散させることによって、彼らが南アジア・ムスリム社会においてどのようにしてイスラームの権威を獲得していったかという軌跡を論じている。1857年のインド大反乱を契機にムスリムが南アジアにおける統治権を失った状況において、ターナヴィーはイスラームの知（‘ilm al-dīn）[53]の再生、自己の純化・昇華、イスラーム法学、政治運動などをウラマーの権威回復のための手段として採用した。この論考では、ターナヴィーは一貫してイスラームの伝統を近代インドにおけるムスリムたちの生存戦略として位置付けていたことが明らかにされている。またMianはターナヴィーの生涯を概観する際、彼が神秘思想に関心を寄せていたことや、イブン・アラビーから影響を受けていたことについて述べており、彼の思想的背景とイブン・アラビーを関連付けて論じようとする姿勢が読み取れる。

IV-2. ターナヴィーのイスラーム法学に関する先行研究

ここでは法学者としてのターナヴィーの側面に着目した研究を紹介するが、彼の改革思想家としての側面に焦点を当てた研究よりも圧倒的に少ない。彼のイスラーム法学に関する研究で最もよくまとめられたものが［Khan 2008］であり、ターナヴィーが女性の離婚の権利問題について取り上げたファトワー集『無力な妻たちのための完全な戦略（*al-Ḥīlah al-Nājizah li al-Halīlāt al-‘Ājizah*）』[54]（以下『完全な戦略』）を資料として用いている。この論考では『完全な戦略』の分析を通して、ターナヴィーが当時の南アジア社会におけるムスリム女性の離婚問題をどのように解決しようとしたのか、また当時のウラマーたちがどのようにして法学的権威を獲得していったのかということが中心的に論じられている。当時の南アジア・ムスリム社会においては、女性が夫と離婚するためには棄教するしか手段がなかったことや、イスラーム法の規定によって裁くムスリムの裁判官が不在であったことが女性の離婚問題における主な問題であった。そこでターナヴィーは、地方審議会がムスリム裁判官の代わりに法学的権威を行使することを認めるjamā‘at al-muslimīn al-‘udūlというマーリク学派の法学規定を援用することにより、女性の離婚の権利拡大の機会を与えたという[55]。また、ターナヴィーは『完全な戦略』においてイスラーム法学者のみが理解できる専門的な議論を展開することで、法学的議論はウラマーの特権的事項であって、彼らのみがシャリーアを解釈し、イジュティハードを行使できる存在であることを証明しようとした。Khanは主にターナヴィーの法学観について論じているが、議論は女性の離婚問題が中心であり、法学的な解釈を通して女性の離婚権拡大を目指したという意味では、彼のイスラーム改革運動の一側面に関する研究として位置付けることも可能であろう。

53）預言者の知識（prophetic knowledge）とも言い換えられ、ウラマーがその知識を民衆に伝える媒介的存在となる（Mian, *op. cit.*, p. 88）。

54）このファトワー集は1933年に完成しており、現在では『完全な戦略、すなわち女性の離婚取消の権利（*al-Ḥīlah al-Nājizah ya‘nī ‘Auratōn kā Ḥaqq-i Tansīkh-i Nikāh*）』という書名で刊行されている。

55）Fareeha Khan, “Traditionalist Approaches to Sharī‘ah Reform: Mawlana Ashraf ‘Ali Thānawi’s Fatwa on Women’s Right to Divorce,” Ph. D. diss, The University of Michigan, 2008, p. 201.

IV-3. ターナヴィーの神秘思想に関する先行研究

本章の第1節で述べたように、ターナヴィーはスーフィズムの実践をイスラーム改革の手段として用いており、彼の改革思想に関する多くの研究もスーフィズムと関連づけて論じられている。しかし、本節で紹介する先行研究において、彼のスーフィズム観は改革思想・運動とは切り離された形で扱われており、より形而上的な側面について中心的に論じられている。具体的な先行研究をそれぞれ紹介していく。[Abudullah 2010] や [Khwājah 1999] ではターナヴィーのスーフィズムにおける霊魂論や存在論といった思想的側面が主に論じられている。トピックは様々であり、神との合一や奇跡といった超越的次元から、恥や恐れ、嫉妬、自惚れといった感情への向き合い方のような日常的事柄まで幅広く取り上げられている。両研究で共通しているのは、イスラーム法の規範に厳格に従うことによって内面に変化がもたらされ、スーフィーとしてより高尚な階梯に到達することができるという、シャリーアとタリーカの一体性を強調するターナヴィーのスーフィズム観が明らかにされていることである。しかし、Abudullah と Khwājah の両研究はターナヴィーの神秘思想家としての側面に着目し、彼のスーフィズム観について網羅的に論じているものの、彼の存在一性論への言及は断片的なものにとどまり、イブン・アラビーからの具体的影響の考察も全くなされていない。

[Nawi et al. n. d.] は『洗練されたスンナからのタリーカの真実』(以下『タリーカの真実』) を資料として用いてターナヴィーのスーフィズムに対する見解を論じている。『タリーカの真実』は1327/1909年に完成し、スーフィズムに関連する内容のハディースの章句にウルドゥー語による訳と注釈を施していくという形式を取っている。また、『タリーカの真実』は彼のタサウウフに関する大著である『タサウウフの重要な諸問題についての開示』の一部分にのちに組み込まれることとなる[56]。ターナヴィーはスーフィズムをクルアーンやハディースの教えに基づいて語っており、スーフィズムは決してイスラームからの逸脱ではないと主張している。ただ、スーフィズムにシャリーアの規範と反するような要素が含まれていることは事実であり、それらを取り除いていくことで正しいスーフィズムの実践に至ることの必要性をターナヴィーは説いている。

この論考ではターナヴィーの存在一性論について重要な言及が見られる。Nawi らによると、ターナヴィーは神との合一に関しては中間の立場を取ったという。すなわち、神と人間の合一体験を全面的に否定はしないが、合一体験の時の神への近さとは神の本質への近さということではなく、彼の属性や知識への近さを意味し、人間は決して神の本質に溶け込むことはないと述べている[57]。神と人間は本質的に異なる存在であるが、体験的に神との合一に至ることができるという考え方は目撃一性論の理論に近いと言える。Nawi らの論考は、ターナヴィーがイブン・アラビー思想の熱心な擁護者でありながら目撃一性論の考え方も受け入れたという、彼のイブン・アラビー学派としての位置付けを検討する際の重要な視座を提供していると言える。しかし、それを踏まえた上でターナヴィーを南アジアのイブン・アラビー学派の中にどう位置付けるかということについての考察は全くなされておらず、筆者が今後取り組んでいくべき研究課題であると言える。

[Siyāl 2014] は南アジアにおける存在一性論と目撃一性論の関係について、具体的なスーフィー

56) Ashraf ʻAlī Thānavī, *A Sufi Study of Hadith*, Yusuf Talal Delorenzo (tr.), London: Turath Publishing, 2010, p. 18.

57) Zaharudin Bin Nawi, and Zunaidah Binti Mohd Marzuki, "Sheikh Ashraf ʻAlī Thānawī dan Pendirian Beliau terhadap Isu-Isu Tasawwuf: Satu Analisa terhadap Risalah Hadis ʻḤaqīqat al-Ṭarīqah min al-Sunnah al-ʻAnīqahʼ," n. d., pp. 14–15.

の著作や思想を事例として挙げながら論じており、その中でターナヴィーの存在一性論についても紹介している。ターナヴィーは自著『もっとも高貴なる倫理への望まれるものの援助（*Imdād al-Mushtāq ilā Ashraf al-Akhlāq*）』（以下『望まれるものの援助』）において、イスラームの信仰告白の章句に基づいて存在一性論を語っており、人間の精神階梯に応じて到達できる境地は異なるという[58]。Siyāl の研究においては、ターナヴィーがワリーウッラーのように存在一性論と目撃一性論の差異を超克しようとしたスーフィーとして描かれている。しかし、ここにおいては『望まれるものの援助』の一作品のみに依拠して論が展開されているため、ターナヴィーの存在一性論やイブン・アラビーとの関係を詳細に明らかにしているとは言えない。

V. おわりに

以上、本稿では南アジアのイブン・アラビー学派およびアシュラフ・アリー・ターナヴィーに関する先行研究を概観してきた。南アジアのイブン・アラビー学派については、当該地域に生きたスーフィーの多くが何らかの形でイブン・アラビーやその後継者たちからの思想的影響を受けていたことが、チティックらの研究によって明らかになっている。しかし、個々の思想家のイブン・アラビー学派的側面を中心的に論じた研究は未だ数少なく、今後の研究の発展が望まれるところである。

ターナヴィーは、19–20世紀インドのイスラーム改革運動という重要な時代において、タフスィール、ハディース学、法学、神学、タサウウフなど様々な分野で膨大な数の著作を残し、当代を代表するウラマーと評されるにふさわしい人物である。しかし、同時に彼はイブン・アラビーの神秘思想に深く傾倒したスーフィーであり、特にイブン・アラビー学派の思想家として重要な存在である。従来のターナヴィー研究では、彼のイスラーム改革思想に関する研究が大部分を占めてきた。その一方で、彼の神秘思想やイブン・アラビー学派としての側面に焦点を当てた研究は非常に少ない。これらを明らかにすることは、南アジアのイブン・アラビー学派研究に貢献するのみならず、ターナヴィー研究の新たな側面を開拓することにもつながる。『叡智の台座の解明に関する特別な言葉』や『イブン・アラビーのタンズィーフに関する喜びの訓戒』といった重要著作から、彼の存在一性論理解やイブン・アラビーからの具体的な思想的影響を明らかにすることを、筆者の今後の主要な研究課題としたい。

VI. 参考文献（南アジアにおけるイブン・アラビー学派及びターナヴィーに関する先行研究リスト）

VI-1. 南アジアにおけるイブン・アラビー学派に関する先行研究リスト

＜日本語文献＞

二宮文子 2010「南アジアにおけるイブン・アラビー学派」東長靖・中西竜也（編）『イブン・アラビー学派文献目録』京都大学イスラーム地域研究センター, pp. xx–xxi.

＜欧米語文献＞

Baljon, J. M. S. 1986. *Religion and Thought of Shāh Walī Allāh Dihlawī, 1703–1762*. Leiden: E. J. Brill.

Buehler, Arthur F. 2011. “Aḥmad Sirhindī: A 21st-Century Update,” *Der Islam* 86, pp. 122–144.

Chittick, William C. 1992. “Notes on Ibn al-‘Arabi’s Influence in the Subcontinent,” *The Muslim*

58）Wāḥid Bukhsh Siyāl, “Maulānā Ashraf ‘Alī Thānavī aur Waḥda al-Wujūd,” in his *Waḥda al-Wujūd va Waḥda al-Shuḥūd*, Lahore: al-Faiṣal Nāshrān, 2014, pp. 55–56.

World 82(3/4), pp. 218–241.

———. n. d. “Waḥdat al-Wujūd in India,” in *Sufism and ‘Irfan: Ibn ‘Arabi and His school*, n. p., pp. 29–40.

Faruqi, Burhan Ahmad. 1979. *Imam-i-Rabbani Mujadid-i-Alf-i-Thani Shaikh Ahmad Sirhindi’s Conception of Tawhid or The Mujaddi’s Conception of Tawhid*. Lahore: SH. Muhammad Ashraf. (Orig. pub. 1940.)

Lawrence, Bruce. B. 1979. *An Overview of Sufi Literature in the Sultanate Period, 1206–1526 A.D.* Patna: Khuda Bakhsh Oriental Public Library.

Lipton, G. A. 2007. “Muḥibb Allāh Ilāhābādī’s *The Equivalence between Giving and Receiving*: Avicennan Neoplatonism and the School of Ibn ‘Arabī in South Asia,” M. A. Thesis, the University of North Carolina at Chapel Hill.

Rizvi, S. A. A. 1983. *A History of Sufism in India*. 2 vols. New Delhi: Munshiram Manoharlal.

Sabir, I. 2004. “Impact of Ibn ‘Arabi’s Mystical Thought on the Sufis of India during the Sixteenth Century,” in Neeru Misra ed., *Sufis and Sufism: Some Reflections*, New Delhi: Manohar, pp. 129–142.

Schimmel, Annemarie. 1980. *Islam in the Indian Subcontinent*. Leiden: E. J. Brill.

Shahzad, Qaisar. 2006. “Ibn ‘Arabi’s Studies in Urdu,” *The Muhyiddin Ibn ‘Arabi Society Newsletter* 22, p. 2.

Stavig, Gopal. 2009. “Ibn ‘Arabi’s Influence in Muslim India,” *Journal of the Muhyiddin Ibn ‘Arabi Society* 45, pp. 121–132.

Umar, Muhammad. 1993. “The Doctrines of Waḥda al-Wujūd and Waḥda al-Shuhūd,” in his *Islam in Northern India during the Eighteenth Century*, New Delhi: Munshiram Manoharlal, pp. 115–124.

＜ウルドゥー語文献＞

Niẕāmī, K. A. 1966. *Tārīkhī Maqālāt*. Delhi: Nadwat al-Muṣannifīn-i Urdū.

VI-2. ターナヴィーに関する先行研究リスト

＜日本語文献＞

牧野真理 2005「北インドのムスリム社会における婚姻に関する規定について——ターナヴィー著『天国の装身具（Bihishti Zewar）』より」『アジア太平洋論叢』15, pp. 131–151.

——— 2009「アシュラフ・アリー・ターナヴィー著『天国の装身具』」『イスラーム世界研究』3(1), pp. 461–476.

＜欧米語文献＞

Abbasi, Shahid Ali. 2000. “Rethinking in Islam: Ashraf ‘Ali Thānawī on God and Man,” *Islamic Culture* 74(1), pp. 47–87.

———. 2001. “Rethinking in Islam: Ashraf ‘Alī Thānawī on Way and Way-Faring,” *Islamic Culture* 75(3), pp. 31–72.

Abdullah, Muhammad. 2010. *Islamic Tasawwuf: Shari‘ah and Tariqah: Mysticism (Sufism) from Qur’an and Hadith according to Mujaddid Thanwi*. New Delhi: Adam Publishers and

Distributers.

Ahmad, Faruqan. 1986. “Contribution of Maulānā Ashraf ‘Alī Thānavī to the Protection and Development of Islamic law in the Indian Subcontinent,” *Islamic and Comparative Law Quarterly* 71, pp. 71–79.

Ahmed, Khalil. 2015. “The Role of Deobandi Ulema in Strengthening the Foundations of Indian Freedom Movement (1857–1924),” *Pakistan Journal of Islamic Research* 15, pp. 39–48.

Ali, Mubarak. 1988. “*Bihishti Zewar* and the Image of Muslim Women,” *South Asia Bulletin* 8, pp. 59–63.

Ansari, A. S. Bazmee. 1986, s. v. “Ashraf ‘Alī,” *The Encyclopedia of Islam*, New Edition, vol. 1, Leiden: E. J. Brill.

Ansari, Usamah Yasin. 2010. “The Pious Self is a Jewel in Itself: Agency and Tradition in the Production of Shariatic Modernity,” *South Asia Research* 30(3), pp. 275–298.

Ernst, Carl W., and Bruce B. Lawrence. 2002. *Sufi Martyrs of Love: The Chishti Order in South Asia and Beyond*. New York: Palgrave Macmillan.

Hermansen, Marcia K. 1997. “Rewriting Sufi Identity in the Twentieth Century: The Biographical Approaches of Maulānā Ashraf ‘Alī Thānvī (d. 1943) and Khwājah Ḥasan Niẓāmī (d. 1955),” unpublished paper presented at the International Conference on Asian and North African Studies, Budapest, July.

Ingram, Brannon D. 2011. “Deobandis Abroad: Sufism, Ethics and Polemics in a Global Islamic Movement,” Ph. D. diss., The University of North Carolina at Chapel Hill.

———. 2014. “The Portable Madrasa: Print, Publics, and the Authority of the Deobandi ‘Ulama,” *Modern Asian Studies* 48(4), pp. 845–871.

———. 2015. “Crises of the Public in Muslim India: Critiquing ‘Custom’ at Aligarh and Deoband,” *South Asia: Journal of South Asian Studies* 38(3), pp. 403–418.

———. 2018. *Revival from Below: The Deoband Movement and Global Islam*. Oakland: University of California Press.

Kāpodravī, Ḥaḍrat Maulānā ‘Abdullāh Sāḥib. 2018. *Maktūbāt-e-Ashrafiyya: The letters of Ḥakīm-ul-Ummat Ḥaḏrat Moulānā Ashraf Ali Sāhib Thanwi Raḥimahullāh and Ḥaḏrat Moulānā Isa Sāhib Ilāhā-Bādī Raḥimahullāh*, ed. Ismail Ibn Yusuf Kauthar Kosāri Falāhī, tr. Riḏwān Kājee. Lusaka, Zambia: Al-Qamar Publications.

Khan, Fareeha. 2008. “Traditionalist Approaches to Sharī‘ah Reform: Mawlana Ashraf ‘Ali Thānawi’s Fatwa on Women’s Right to Divorce,” Ph. D. diss., The University of Michigan.

———. 2009. “Maulānā Thānavī’s Fatwa on the Limits of Parental Rights over Children,” in Barbara D. Metcalf ed., *Islam in South Asia in Practice*, Princeton: Princeton University Press, pp. 305–316.

Khan, Shaykh Masihullah. 2005. *The Path to Perfection: An Edited Anthology of the Spiritual Teachings of Hakim al-Umma Mawlana Ashraf ‘Ali Thanvi*. Santa Barbara: White Thread Press.

Khwajah, Ahmad Ali. 1999. *Maulana Ashraf Ali Thanvi: His Views on Moral Philosophy and Tasawwuf*. New Delhi: Kitab Bhawan.

Malik, Rizwan. 1996. “Muslim Nationalism in India: Ashraf ‘Ali Thanawi, Sabbir Ahmad Uthmani,

and the Pakistan Movement," *Pakistan Journal of History and Culture* 18(2), pp. 73–82.

Metcalf, Barbara D. 1982a. *Islamic Revival in British India: Deoband, 1860–1900*. Princeton: Princeton University Press.

———. 1982b. "Islam and Custom in Nineteenth-Century India: The Reformist Standard of Maulānā Thānawī's 'Bihishtī Zēwar'," *Contributions to Asian Studies* 17, pp. 62–78.

———. 1984. "Islamic Reform and Islamic Women: Maulana Thanawi's 'Jewelry of Paradise'," in Barbara D. Metcalf ed., *Moral Conduct and Authority: The Place of Adab in the South Asian Islam*, Berkeley: University of California Press, pp. 184–195.

———. 1992. *Perfecting Women: Maulana Ashraf Ali Thanawi's Bihishti Zewar*. Berkeley: University of California Press. (Orig. pub. 1990.)

———. 2006. "Reading and Writing about Muslim Women in British India," in her *Islam in Contestations: Essays on Muslims in India and Pakistan*, New Delhi: Oxford University Press, pp. 99–119. (Orig. pub. 2004)

Mian, Ali Altaf, and Nancy Nyquist Potter. 2009. "Invoking Islamic Rights in British India: Mawlana Ashraf 'Ali Thanawi's *Ḥuqūq al-Islam*," *The Muslim World*, 99(2), pp. 312–334.

Mian, Ali Altaf. 2015. "Surviving Modernity: Ashraf 'Alī Thānvī (1863–1943) and the Making of Muslim Orthodoxy in Colonial India," Ph. D. diss., Duke University.

Naeem, Faud S. 2009a. "A Traditional Islamic Response to the Rise of Modernism," in Joseph E. B. Lumbard ed., *Islam, Fundamentalism and the Betrayal of Tradition, Revised and Expanded: Essays by Western Muslim Scholars*, Bloomington: World Wisdom, pp. 79–116. (Orig. pub. 2004.)

———. 2009b. "Sufism and Revivalism in South Asia: Mawlānā Ashraf 'Alī Thānvī of Deoband and Mawlānā Aḥmad Razā Khān of Bareilly and their Paradigms of Islamic Revivalism," *The Muslim World* 99(3), pp. 435–451.

Nizami, Moin Ahmad. 2017. *Reform and Renewal in South Asian Islam: The Chishti-Sabris in 18th–19th Century North India*. New Delhi: Oxford University Press.

Qureshi, Jawad. "Ibn 'Arabī's *Fuṣūṣ al-Ḥikam* in the Deobandī *Maslak*: Ashraf 'Alī Thānavī's *al-Ḥall al-Aqwām li 'Aqd Fuṣūṣ al-Ḥikam*," Paper presented at the Annual Conference on South Asia. Center for South Asia at the University of Wisconsin-Madison. October 17–20, 2013.

Robb, M. E. 2017. "Advising the Army of Allah: Ashraf Ali Thanawi's Critique of the Muslim League," in Ali Usman Qasmi ed., *Muslims against the Muslim League: Critiques of the Idea of Pakistan*, Delhi: Cambridge University Press, pp. 142–168.

Rozehnal, Robert. 2009. *Islamic Sufism Unbound: Politics and Piety in Twenty-First Century Pakistan*. New York: Palgrave Macmillan. (Orig. pub. 2007.)

Saeed, Ahmad. 1999. "Quaid-i-Azam and Mawlānā Ashraf Alī Thānvī," *Journal of the Pakistan Historical Society* 47(3), pp. 23–28.

Vanzan, Anna. "Medical Education of Muslim Women in Turn-of the-Century India. The 9th Chapter of the 'Bihishtī Zēwar'," *Journal of the Pakistan Historical Society* 48(1), pp. 40–50.

Zaman, Muhammad Qasim. 2008. *Ashraf 'Ali Thanawi: Islam in Modern South Asia*. Oxford: Oneworld.

＜ウルドゥー語文献＞

A‘ẕamī, Abūlḥasan. 2004. *Haẕrat Thānavī kē Pasandīdah Vāqe’āt*. Lahore: al-Mīzān.

Bukhārī, Ḥāfiẓ Muḥammad Akbar Shāh. n. d. *Kārvān-i Thānavī: Ḥakīm al-Ummat Haẕrat Maulānā Ashraf ‘Alī Thānavī kē 192 Khulafā, Majāẕīn-i Khulafā aur Mumtāẕ Mutavassilīn kē Ḥalāt va Kamālāt kā Jāmi‘ Taẕkirah*. Karachi: Idārat al-Ma‘ārif.

Daryābādī, ‘Abd al-Mājid. 1998. *Tafsīr-i Mājidī*. 2 vols. Karachi: Majlis-i Nashriyāt-i Qur’ān.

Ghawrī, ‘Azīz al-Ḥasan. 2008. *Ashraf al-Savāniḥ*. 4 vols. Khwājah ‘Azīz al-Ḥasan Majẕūb and Maulānā ‘Abd al-Ḥaqq eds., Karachi: Dār al-Ishā‘at.

Ḥusnī, Sa‘īd ‘Abd al-Ḥa’i bin Fakhr al-Dīn. 2006. *Tēṛhōṉ Ṣadī kē ‘Ulamā-yi Barr-i Ṣaghīr*, tr. Anwār al-Ḥaqq Qāsimī, Karachi: Dār al-Ishā‘at.

Marḥūm, Mas‘ūd Ḥasan. 1993. *Irshādāt-i Ḥakīm al-Ummat: Qur’ān va Sunnat kī Raushnī meṉ Zindagī kē Tamām Sho‘bōṉ sē muta‘alliq Jāmi‘ Hidāyat*. 2nd ed. Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt.

Phūlpūrī, Shāh ‘Abdulghanī. 1993. *Uṣūl-i Taṣawwuf*. 2nd ed. Lahore: Idārah-yi Islāmiyyāt.

Siyāl, Wāḥid Bukhsh. 2014. “Maulānā Ashraf ‘Alī Thānavī aur Waḥda al-Wujūd,” in his *Waḥda al-Wujūd va Waḥda al-Shuḥūd*, Lahore: al-Faiṣal Nāshrān, pp. 54–60.

Sarvar, Ṣūfī Muḥammad. 1994. *Maslak-i Thānah Bhavan: Haẕrat Maulānā Ashraf ‘Alī kē Mavā’iẓ kē Āsān Khulāṣē*. Lahore: Idārah-yi Ishā‘at-i Ḥaqq.

Shahīd, Niẓām al-Dīn Shāmzī. n. d. *Ḥaẕrat Maulānā Ashraf ‘Alī Thānavī kā Ṭarīqah-yi Iṣlāḥ*. Sa‘īd Abrār ‘Alī ed., Lahore: Bayt al-‘Ulūm.

＜その他言語の文献＞

Nawi, Zaharudin Bin, and Zunaidah Binti Mohd Marzuki. n. d. “Sheikh Ashraf Ali Thanawi dan Pendirian Beliau terhadap Isu-Isu Tasawwuf: Satu Analisa terhadap Risalah Hadis *Haquqat al-Tariqah min al-Sunnah al-Aniqah*,” （マレー語）
<https://www.academia.edu/8750897/Sheikh_Ashraf_Ali_Thanawi_A_Study_Of_Tasawwuf_Issues_In_His_Haqiqah_Al-Tariqah_Min_Al-_Sunnah_Al-Aniqah_>（2019 年 6 月 5 日閲覧）.

＜ウェブサイト＞

Mian, Ali Altaf. 2019. “Ashraf ‘Ali Thanawi’s Conceptions of Islamic Mysticism,” (‘Ilm Gate) <https://www.ilmgate.org/ashraf-ali-thanawi%E2%80%99s-conception-of-islamic-mysticism/>（2019 年 7 月 10 日閲覧）.

Rahman, Zameelur. 2014. “Mawlana Thanawi on Wahdat al-Wujud,” (Darul Ma‘arif). <http://darulmaarif.com/thanawi-wahdat-al-wujud/>（2019 年 5 月 29 日閲覧）.

Usmani, Mufti Muhammad Taqi. 2010. “Wahdat al-Wujud, Wahdat al-Shuhud and the Safest Position,” (Deoband.org) tr. Zameelur Raḥman.
<https://www.deoband.org/2010/05/hadith/hadith-commentary/wahdat-al-wujud-wahdat-al-shuhud-and-the-safest-position/>（2019 年 5 月 22 日閲覧）.